

宵闇解放 シンフォギア

火野ミライ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新連載！

「行けるって！案外何とかなるもんだから。」

自由気ままの転生者、ルーミア

特異災害、ノイズ。そして現れる欲望の怪人、グリード。

数多脅威が、人々を滅ぼす。

「俺達が守りたいのは、機密ではない。人の命だ！」

メダルと聖遺物を廻る運命が動き出す。

「何、それ・・・」

「メダルの元は、人間の欲望。」

「変身！」

《タカ！トラ！バツタ！》

【宵闇解放 シンフォギア】開始

活動報告にて、オリジナルコンボ（メダル）募集！！

目次

001：転生後の時間

第一話：神と転生とトラブル — 1

第二話：振り返りと特典と異星人

9

第三話：その後と裏切りと失うもの

14

002：始まりの序曲

第①話：夢と日本と思い — 20

第②話：ノイズと二課と戦闘 — 26

第③話：説教と資料と決意 — 34

第④話：ライブと惨劇と最強コンボ

40

003：つながる手と欲望の王

第1話：観察と猫と不穏な空気

50

第2話：初回特典と逃走と覚醒の鼓動

— 55

第3話：食事と説明と変身 — 66

第4話：混戦と怪人と攻防のコンボ

75

第5話：計画と思いとオレンジ色

84

第6話：怒りと鎧と即席タッグ

88

第7話：操る杖と魅せる攻撃と灼熱コ

	ンボ	98
	第8話：おとぎ話と出会いと交差する	
	思い	107
	第9話：移送計画と爬虫類のヤミーと	
	海のコンボ	119
	第10話：不滅の刃と暴走と吸収コン	
	ボ	132
	第11話：疲労と相談と防御のコンボ	
	第12話：バトルマニアと仲間と再開	144
	第13話：雨の日と悲しみと旧友	162
175		
	第14話：信用と仲直りと重力コンボ	
	第15話：死体と調査とクリスの涙	189
	第16話：激戦と新ライダーと水のコ	198
	ンボ	207
	第17話：コンボと集まった戦士と巫	
	女の欲望	226
	第18話：別れと託されたモノと炎の	
	コンボ	239
	第19話：満月と思いと悲痛な叫び	
	第20話：叫びと決戦と無敵のコンボ	243

第21話：歌とシンフォギアの覚醒と

247

ライダーソウル

255

001：転生後の時間

第一話：神と転生とトラブル

（主人公視点）

見渡す限り、マグマ マグマ マグマ

時々、隕石。

世紀末どころか、世界の終りの光景だな。

取り合えず、僕がこの光景を見ることになった原因を聞いてもらおうか。

そうそれは、数時間前・・・

何もない真っ白な空間。そこに僕は、存在していた。

目の前には神々しいって言葉が似合いそうな少女がいた。

『誰が、少女ですか!?! 確かに研修神だけどき・・・』

こいつ！直接脳内に！（言いたいだけ。）

てか、研修神？

『気にしないでください!』

あ、はい。

・・・あれ、口に出た?

『出てないですよ。思考を読んだだけです。』

・・・エスパー?

『神です!』

何故か、どや顔で言う?少女(神)

状況は、だいたい分かった。

死んだ記憶もあるし、いわゆるテンプレ^{転生}だろう。

『テンプレって・・・』

『生きとし生きるものすべて、転生してるんだけどなあ』

『記憶と力を決めてから行くのは、確かに少ないけど。』

・・・一応、説明をプリーズ。

『説明も何も、君は、死んだから転生をする。』

そして、運がいいことに前世の記憶といわゆる特典がもらえる。

それだけだよ。』

だいたい分かった。(二回目)

『え〜つと。』

『ふむふむ。まずは、君が転生する世界を決めようか。』

決められるの？

『私の部署では！』

．．．なるほど

『候補は、

【1. 魔法少女まどか☆マギカ】

【2. 東方Project】

【3. 戦姫絶唱シンフォギア】

の三つ！』

戦っても生き残れない！

何故その三つ？

『上司の気まぐれだから．．．』

．．．どうやって決めるの？

『え〜つと。』

『く、』

く？

『くじ』

【マニユアル】を片手に近づいてきた神様が、差し出してきたのは、箱に入った三本の棒。古典的な「くじ」だなと思いつながら一本引く。

『三番の戦姫絶唱シンフォギアの世界です。』

確か、人がオルフェノクに襲われたみたいなのに、灰化する世界だっけ？

『？』（マニユアルペラペラ）

『多分それです。オルフェノクって何？』

友人がなんか、言ってるだけの知識しかないのだけど。

『大丈夫です。死んでも戻って来るだけです。』

・・・だいたいじゃない奴

『と、特典を決めましょう。』

『このガチャを三回まわしてください。』

これ、結構大事な奴。

一個目は・・・【ルーミア】？東方の？

『見せてください。』

『・・・これは、ですね。』

ルーミアと言う妖怪に転生する奴です。』

・・・せ、性別は？（震え）

『？ 女です。』

ついでに能力もセットのやつです。

あたりの方だと思いますよ。』

ははは。もういいや、次！（ヤケクソ）

【仮面ライダーオーズ】・・・オーズ!?

ライダー好きとしては、うれしいけど内容は？

『え〜つと。』

【オーズの器】と【ベルト】と【メダル】らしいです。』

『あ、【ルーミアのお札】を付けた状態で変身すると、力を抑えて状態で変身できますよ。』

うん？分かった。

ラストは・・・【ゲーム】

一番わけわからん。

『これは・・・』

『ゲームのように収納・整理できる者みたいです。』

分かるような？分らないような？

『こればかりは、完全に使用者のイメージしだいですから。』

なるほど。

『それでは、すべての工程は、終えましたのでそちらの門をくぐってください。』
なあ。神様、最後に名前教えてもらっていいかな？

『私の名前？【メイ】だけど。』

ありがとう。それじゃあ。

そうして僕は、門を通った。

・・・そして、目が覚めて冒頭へ

「まじで、どういう事？」

っあ！まじで女子ルーミアになったのね。

よくみたら、服装もルーミアの物だし・・・

あと、言わなかったけど僕、空中に立ってるし。

『あの〜聞こえていますか？』

「っえ！どっから聞こえてるの？」

僕以外の生命体なんていないけど・・・

『直接、頭の中に声を届けてます。』

本当、神様メイトって何でもありだな。

『え〜つとですねえ〜。』

☆神様説明★

「・・・つまり、

ここは、【誕生したての地球】で

書類の記入忘れで、僕は、ここに居る。

僕が、空中に立っているのはいわゆる結界の中で、

この星である程度暮らせるようになるまでのシエルターでもあると。」

『はい。すみません。』

謝られても・・・

『メイには、私の方からきつく言っておきますから。』

この人神は、メイちゃん（雰囲氣的に）のお姉さんで【リア】さん。

メイちゃんが、なかなか説明しないから出てきた人神

『お姉ちゃん、私どうなるの？』

『さあ？ルーミアさんしだいかな？』

「何で？」

『取り合えず、上に報告して、しばらくルーミアさんのサポートをなささい。』

・・・神様も楽しじゃなさそう。そう思った日なのでした。

第二話：振り返りと特典と異星人

↳ルーミア視点↳

やつほく！みんな久しぶりなのだ〜

・・・っえ？久しぶりでもないし、僕のキャラが変わってる？

ＯＫＯＫ、順番に説明しよう。

まずさっきの「久しぶり」は、前回から何億年も経っているからなのだ〜。

キャラが変わっているのは、単純に「ルーミアロール」って言うやつ。

まあ、地球（正確には、原始地球）誕生直後がなんて、みんな気にならないでしょう。

てか、思い出したいくないのだ〜

・・・全部話さないのは、まずいか〜？

じゃあ、箇条書きで説明するのだ。

・結界の中で能^{ルーミアの力}力の特訓をしていた。

・ある程度生き物が住めるようになってからは、地上で生活。

・メイちゃんとは、その時お別れした。

・その時に「いつかの明日」に再開することを約束。

・その後は、オーズのタトバに変身して恐竜と戦ったり。(初変身の相手が、ティラノサウルス)

・氷河期の時に、紫恐竜のコアメダルが体内に入ったり。

・後、食事で嘔吐したことが何回も

人間と妖怪の差を、感じたのが食事だったな

なんで、自分で思い出したくないエピソードを話したんだろう？

まあ、いいのだ。

え？コアメダルが体内に入っている？

大丈夫！お札でグリード化は、抑えられているみたいだから。(リアさん情報)

取り合えず、僕の転生特典について解説してみるのだ(唐突)

特典その1. ルーミアの容姿と能力

まず、【ルーミア】とは、【東方Project】のキャラクター

まあ、一ボスなんだけど。

東方Project・・・長いから【東方】で！

東方は、新シリーズになつてから【弹幕シューティングゲーム】に！(一部例外あり)

見た目は幼い少女で、低身長。赤目に、黄色の髪でボムカット。

服は、白くの洋服で、ロングスカート。(もう慣れた。)

頭には、リボンのような【お札】が（本家と違って任意で取れた。）

【闇を操る程度の能力】を持つている。

後は、妖力が使えるのと。空も飛べる。スペルカード（必殺技？に使うカード）もあった。

前世が人間のためか、霊力もある。お札を取るとパワーアップ（二次的に言うとうとEX）ルーミアの力だけでも、なんとかかなりそうな気がするのだ。

特典その2. 仮面ライダーオーズの力

【仮面ライダーオーズ】は、平成ライダー12番目の主人公ライダー。

無限を超えた進化。メダルの組み合わせによる多彩なフォームがうり。（まさかの千越えらしい）

【オーズドライバー】や【オーメダル】は、【ガラ】を始めとした錬金術師よって作られた。

また、決め台詞がない仮面ライダー。

【オーズの器】

オーズと言うライダーは、常に【暴走】する可能性がある。

オーズの主人公【火野映司^{ひのえいじ}】は、

いくら変身しようと暴走しないオーズ器があつたため暴走しなかつた。(紫のコンボ以外)

【真のオーズ】の資質をもつ最適合者が、オーズの器を持つのだろうか？

【オーメダル】

武器などに使う【セルメダル】(消耗品)

オーズ変身に使う【コアメダル】(紫の力以外で破壊不可)

本当は色々ややこしいけど、割愛するのだ

後、オーズの説明としては、特定のメダルの組み合わせで、【コンボ】が発動。

特典その3. ゲームのような収納と整理

これは・・・なんて説明しよう？

僕の場合だと、闇を操る程度の能力と組み合わせ使っている。

収納の仕方は、それ専用の闇の中にポイ。

整理は、闇に僕にしか見えない【メニュー画面】を投影。

取り出すときは、頭の中でイメージして取り出す。

・・・以上！

お、思ったより長くなっちゃったのだ

まあ、確認したのにも理由がありません……
目のまえに、異星人なにかいるんですけど。

まだ、人類誕生すらしてないんですけど。

「我が名はシエム・ハ。シエム・ハ・メフオラス。」
「ルーミアなのだ」

……日本語で喋ったし。

第三話：その後と裏切りと失うもの

「ルーミア視点」

「我が名はシエム・ハ。シエム・ハ・メフォラス。」

「ルーミアなのだ」

あれから、数年の月日が経った。

・・・と言つても、自己紹介して地球この星で自分たちの実験をさせてくれ、
と言う感じの会話をしただけなのだ

シエム・ハを始めとした「アヌナキ」が、

自分たちの問題解決のため生命の創造を始めちゃった。

結果「ルル・アメル」・・・人類誕生！

まあ、プロトタイプが完璧すぎたから、押せえるの大変だったなく（遠い目）

プロトタイプ「アダム」が暴れた理由が、破棄死されたたくくないないと言う欲望が元だった。

たまたま、他のアヌナキがそんなのと言つてるのを耳にしたらしい。

それを聞いたシエムが、激怒したのだ。なんでも、アダムの開発にはかかわってたら
しい。

正直、あつたころのシエムなら言わなかったと思うのだあ。

シエムの名のもと、アダムは自由を獲得したのだ。

おっと、少し話が脱線しちゃったのだく

今ねえ、なんと！アヌナキが大ピンチ！

シエムが言うには、裏切り者が出たらしいのだく

これは、言っているのか分かんないけど・・・

【統一言語】で、強化されるらしい。

今、【エンキ】の部隊が討伐に月に行っているのだ。

・・・つえ？僕？

僕は、今シエムに「一緒にこの星を出よう」と言われたばかりなのだ。

「・・・ごめん。」

「!? どうして！この星は【ギル】により・・・」

「それでも地球この星は、僕の故郷だから。」

シエムに話しかける前につけてたベルトに、胸部から出た三枚のメダルをセット！

【オースキャナー】で読み取る。

キン！キン！キン！ズツキューン！

「変身！」

《 プテラ！ トリケラ！ テイラノ！ 》

《 プ・ト・テイラーノ・ザウルース!! 》

僕は、お札を付けたままオーズに変身。

力を抑え、暴走に危険性が減った「プトテイラコンボ」に！

・・・見た目は、プリ○○○みたいな感じに。（お札を取って変身すると普通。）

僕は、月に向かって飛ぶ。

・・・見えた！僕は、ギルに向かって拳を振るう。

「普通に躲されたのだ〜」

「君は？」

「ルーミアなのだ〜」

君が、エンキであつてるよね？」

「ああ・・・」

「つち！まだ、仲間が居やがったのか！」

くシエム・ハ視点く

ルーミア、地球での最初の友人。

彼女は、気分屋でいつも自分が気になることに集中する。

それでも、いざつて時は案外頼りになる子。

なんでも、地球が惑星として誕生した時からこの星にいるらしい。

それを知ってて私は、ルーミアに地球から離れる提案をした。

ルーミアは提案を断り、話に聞いてたオーズなると、月へと飛んだ。

「・・・我も甘くなったもんだ。」

く三人称視点く

ギルは、ルーミアを月に叩き落す。

「うわあああ」

ルーミアが月に落ちるとそこに新たなクレーターを作ることになった。

ギルがとどめを刺すため、エネルギーをためる。
「させるか!？」

エンキが攻撃をする事で、躲されたものの阻止。
「うおおおお！」

《 プ・ト・テイラーノ・ヒツサツ!! 》

「セイヤアア！」

【グランド・オブ・レイジ】がギルの肩をかすめる。

「やっつと、一発当たったのだ〜」

「それでも、かすめただけか・・・」

「だいぶ、苦戦しているようだな。」

「シエム! どうしてきたのだ？」

「我が、友人を見殺しにするとでも？」

「シエム！」

ルーミアがシエム・ハに抱き着く。

「ル、ルーミアお、落ち着かんか。」

「貴様ら、俺をほったからしで茶番とは、随分と余裕だな。」

「行くぞ! 二人とも!!」

「ああ！（うん。）」

・・・数時間後、人類は統一言語を失った。

002：始まりの序曲

第①話：夢と日本と思

（三人称視点）

少女が紫の斧を手に、黒髪の青年男性に切りかかる。

黒髪の男性は、少女にはない、リーチの広さで遊撃する。

少女と入れ替わるように、青髪の青年男性と白髪の青年女性が攻撃を仕掛ける。

黒髪の男性は、青髪の男性で白髪の女性の遠距離攻撃を防ぐ。

「……さん」

場面は、変わり。

少女と白髪の女性が、弾幕攻撃をしている。

少女の弾幕は美しく、鮮やかで、見ているものを魅入らせるような攻撃。

反対に白髪の女性の弾幕は、相手を倒すために徹底した攻撃。

しかし、黒髪の男性には、効果がないようだ。

「ルー……さん！」

再び場面は、変わり。

少女の着ているズボンの紫の装甲部分が、尻尾になり黒髪の男性に叩きつける。

黒髪の男性に攻撃が当たり、吹き飛ぶ。

追撃しようとした、少女が苦しみます。

少女はまるで、助けを求めめるかのように手を伸ばす。

それを、白髪の女性が掴む。すると少女の服が、白と黒の物に変わる。

「……ミアさんー！」

また場面は、変わる。

ボロボロの青年たちが、月へと向かう。

黒髪の男性は、気絶をしているようで抵抗をしない。

青髪の男性と白髪の女性は、覚悟を決めたような顔つきだ。

一方、バリアに包まれた少女は、二人に手を伸ばしながら地球に落ち行く。

青年たちが月に辿り着くと、月が光だす。

「ルーミアさん!？」

「うう〜ん?？」

「寝ぼけてないで、立ってください！」

日本に着きましたよ。」

「そくなのかく……」

「そくなのかくって……」

ルーミアさん、泣いているんですか!？」

くルーミア視点く

どうやら、アメリカで飛行機に乗った後から寝てたみたいです。

今は、連れがドルを円に換金しに行ってるからそれ待ちなのだく

「ルーミアアさくん！」

どうやら、何もな^い髪^の寝癖^を手櫛^で直したら終わったようだ。

「お待たせしました。」

「もう少し、ゆつくりしてても良かったよく」

「何言ってるんですか！」

「【セレナ】声が、大きい。まだここ空港内。」

「す、すいません。」

【セレナ・カデンツァ・イヴ】

ある、【聖遺物】の回収任務で、出会った子。

ボロボロだったので、拉致ちやった。

(正確には、撤退しなきゃ行けなくなり焦って一緒にだけど……)

今回、ある調査のため日本に来ることになったんだけど……

本来一緒に来る予定だった、妹分が他の任務で来れなくなったから、代わりについてきた。

さつきから任務って言ってるけど、正確にはお手伝いかな？

まあ、とつちでもいいや。

【!?】 ギャーン！

【ルーミアさん?】

たぶん今、セレナには目が一瞬紫色に光ったように見えたはずなのだ。

【気にしないで、【ノイズ】だから。】

【っえ!】

ノイズ、コンピューターの異常。

……この世界の住人的には、超常現象による災害の方が身近だろう。

【認定特異災害】と扱われるノイズ。

見た目は、カラフルな怪物。人間のみ襲う習性がある。

また、人間の化学は通用しないせず、人間に触れると、自身事人間を炭化^灰分解^化させる能力がある。

まるで、人間の天敵として存在しているとは、誰が言ったのだろうか？

・・・僕も、妖怪^{人間の天敵}なんだけどな〜

それは、置いといて。それが、この世界のノイズについて一般的な情報なのだ〜
「行かないと!」

「行くなって何処に?」

「ノイズのところ!」

「プロトバース」では、ノイズと戦うことはできないし、

そもそもプロトバースは、あくまでお守りなのだ〜

「だったら、ルーミアさんg」

「やだ、何で僕が人間の尻ぬぐいをしなきゃいけないのだ?」

「僕はあくまで、妖怪。人間と妖怪は・・・」

「仲良くできますよ。きつと・・・」

・・・泣いちゃった。

僕は、セレナの頭を優しく撫でる。

「ふ、ふっえ！」

「先に、部屋に向かつて。ちよつと行つてくるから。」
「・・・！ はい！」

僕は、セレナの返事を聞きながら空港からでた。

第②話：ノイズと二課と戦闘

〜三人称視点〜

ブォーン！ブォーン！ブォーン！

街に警報が鳴り響く！

「にげろおー」

「ノ、ノイズだー」

認定特異災害が、液晶ディスプレイのような物を輝かせながら人々に迫る。

ノイズの持つ特性「位相差障壁」により、物理法則では対処できず、

生き残るには、「自壊」するまで逃げる事。その為日本では、シエルターに逃げる事が基本だ。

しかし遭遇確率が、通り魔事件にかかわるより低いノイズ。

実際に遭遇したら、果たしてどれだけの人が冷静でいられるだろうか？

「邪魔だーどけー」

「いやだあー！死にたくない！」

もはやそこは、助かりたいという「欲望」が渦巻く場所に。

一匹のノイズが、瓦礫に挟まれて動けない子供に襲い掛かる。それを横目で見た人間は、あの子供は、終わったと思った。

「お母さーん！」

その叫びの後、土煙が舞う。土煙に紛れて、灰が舞う。

そして、ノイズが土煙に注視して動かない。

「つえ？」

先ほどの少年の声が、響く。

周りの人間も驚き、煙を注視。

煙が晴れていく中、オレンジに光る何かが浮かび上がってくる。

煙が晴れるとそこには、

クワガタを思わせる緑頭、銀色のゴリラのような剛腕、鳥のような鋭い爪を持つ赤い脚。

成人男性の身長ぐらいはある、存在が少年の前に立っていた。

その存在は別の世界で、「仮面ライダーオーズ」と呼ばれる戦士だ。

そして今の姿は、オーズが持つ亜種形態「ガタゴリドル」だ。

「大丈夫か？」

「えーう、うん。」

オーズは、瓦礫を退かし少年を立たせる。

・ ・ ・ 見た目とは裏腹に、少し気の抜けた少女の声にビククリしてようだけど。

その時、少年の方を向いているオーズにノイズが突っ込む。

オーズはまるで、見えているかのようにカウンター蹴りをする。

「生きたいのなら、早く逃げる事をお勧めするのだ〜」

その言葉を聞いたその瞬間、行方を見守っていた人々は、逃げ出す。

先ほどとは違い、ノイズを倒す存在がいることで他人に気を使う余裕があった。

「ノイズには、悪いけど寝起きの運動相手になってもらうのだ〜」

一方、日本政府の組織【特異災害対策機動部二課】

そこでは現在、ノイズ災害に対処するため動いていた。

「【装者】は、約10分後には、到着します。」

男性オペレーター【藤堯ふじたか 朔也さくや】が、報告する。

装者厳密には、【シンフォギア装者】

神話や伝承に登場する武具（聖遺物）の欠片から作られたFG式回天特機装束。

人類がノイズに対抗しうる唯一の装備である「シンフォギア」を纏う者を、シンフォギア装者と呼ぶ。

なおシンフォギアは、現行憲法に抵触しかねないため存在そのものを、

完全秘匿状態となっている。そのため限られた、一部の人しか存在は知らない。待ってください！ノイズが反応が次々に消えていきます。」

女性オペレーター「友里ともさと あおい」が、新たな情報を報告する。

「映像、でます。」

「なに！ 赤と黄色と緑の戦士だとおお！」

「エネルギーの感知を！」

この組織の司令官で、赤のカッターシャツとピンクのネクタイを着用している、

風鳴かざなり 弦十郎げんじゅうろうが、驚きのあまり叫ぶ。

それをよそに、白衣を着た女性研究者「櫻井さくらい 了子りょうこ」が、

解析を揺るがす。

「それが、特定どころか感知できません。」

「奏と翼を向かわせろ。」

「ルーミア視点」

「つふー！はあ！」

僕は、腕についているトラクローから出る斬撃波で、ノイズを倒しながら進んでいるのだ。

「！ あった！」

目的の物？それは、ノイズがこつちに出てくるための空間の歪み。

人の目にそれは見えないため、どこともなく現れているように見える。

【メダジャリバー】を取り出し、セルメダルを3枚いれレバーをたおす。

そのまま、オースキャナーでスキャンする。

カン！カン！カン！ ピツキユーン！

《 トリプル・スキャンングチャージ！ 》

「はああー」

この時、空間の歪みに干渉できるようみ、妖術を組む。

簡単に説明すると、メダジャリバーに妖力を送る。

「セイヤアー……！」

【オーズバッシユ・妖】で、射線上の物を空間ごと切り裂く。

一瞬空間がずれれけどすぐ戻り、ノイズと空間の歪みのみ切り裂いた。後は、残っているノイズのみ。

・・・これで、ラスト！

「おわt・・・」

「Cro^クit^ロt^{オー}z^イal^ザ ron^ロze^ンell^ゼ Gun^ガgni^ンir^グ Zi^ニzz^{ール}l^ル」
 「Im^エyu^ミte^テus^ウ am^アno^メha^ノba^ハk^バiri^キtr^リon^ト」

・・・似たようなの、アメリカで見たな

「ちよつと、あんた同行願おうか。」

「うくん？ ヤダ！」

「お前、ふざけているのか！」

「そんなつもりは、無いのだ」

ついでに、真面目にやる気もないのだ。この手の展開は、ねえ。

「じゃあ、バイバイ」

「逃がすものか！」

「・・・！ 危ないな」

剣を持った、青い子が切りにかかって来たけど、トラクローで防ぐ。

簡単に挑発に乗ったな

・・・取り合えず、軽く力を入れて押し出すのだ。

「つう」

「翼！ この野郎！」

よし、槍を持つ赤い子も来た。

「よつと！」

槍で突いて来たから、軽く手を添えていなす。

「うお！」

「奏！」

「大丈夫だ。翼。」

「二人で、行こう！」

「ああ！」

・・・戦い吹っ掛けといてだけど、飽きた。

まあ、この子達の不満の欲望も少しは、減ったかな？

距離を取ってオースキヤナーで、ベルトをスキヤン。

《 スキヤニングチャージ！ 》

「セイヤアア！」

「!?」

僕は、【タトバキツク】をワザと外して、この場を去る。

第③話：説教と資料と決意

（三人称視点）

特異災害対策機動部二課本部では、シンフォギア装者

【あもろう天羽 かなで奏】と【かざなり風鳴 つばさ翼】は、説教をくらっていた。

「奏！翼！俺は、お前たちに未確認と戦えと言ったか！」

「ああ。言つてない。」

「しかし、叔父様！」

奴は、戦う覚悟がありません。実際私たちの攻撃は、かわすだけで反撃してきませんでした。」

「ああ！ それにいざ、攻撃してきても外してた。」

「だからなぜ、未確認を倒すことになってるんだ！」

それに、最後の攻撃お前たちには、外したように見えたのか・・・

緒川！おまえには、どう見えた。」

その言葉を聞き、一人の男性【おがわ緒川 しんじ慎次】が弦十郎の横に来る。

「司令。僕には、ワザと外したように見えませんでした。」

それに、奏さんたちの攻撃もあえて、躲すだけにしてた気がします。」

「えー！」

「仮に外して、あいつに何の得が！」

「それは、僕にも・・・」

「まあまあ、お説教はそこまですてあげなさい。」

指令室にやって来た了子が、説教を中断させる。

「了子君、奴について何か分かったのか！」

「ええ、これを見てちょうだい。」

了子がモニターに、いくつか画像を表示させる。

「それじゃあ。まず、この戦国時代の資料から・・・」

ある日、織田信長の城に旅する武神が訪れていました。

時を同じく、織田の命を狙らう、落ち武者がいました。

落ち武者、織田を見つけると執念により、鎧の妖怪へと変貌する。

織田の軍は、妖怪の力により大苦戦。

しかし、上下三色の鎧を着た武神が、妖怪を退治しました。

妖怪へと変わり果てた落ち武者は、元に戻り、反省し、織田に使えるようになった。

武神は、気づいたらいなくなっていた。

きつと、旅に戻ったのだろう。

武神は、気まぐれなのだから。

「・・・は」

「桜井女史、これは？」

「さつきも言ったけど、戦国時代の織田信長に関する資料の一つよ。」

「では、武神が未確認だと。」

「ええ。次は、江戸時代の資料よ。」

それは、突然だった。

土地が浮かび、ひっくり返る。

元に戻るとそこは、異国の森だった。

異変は、それだけではなく。

異国の森から、たくさんの兵が現れた。

江戸の民は、逃げまどい、恐怖した。

俺が町に着くと、そこには、異形の物。

それと戦う槍を持つ少女と三色の鎧をきた者がいた。

少女たちが、異形の者たちを倒したその時、ガラと名乗る男性が現れた。

それが俺と少女達の出会いだった。

（間の資料無し）

ガラが、オーズから奪ったメダルで異形の獣になる。

獣となったがらは、俺達三人では、止められなかつた。

そこに、鳥や昆虫を思わす怪物が5体現れ、俺達に協力してくれた。

かくしてガラを倒した俺達。

あの後、怪物は消え、少女たちは帰るべき場所に帰った。

「こつちの文献では、少女と共に行動しているのか。」

「他にも世界規模で、見れば資料はたくさんあったわ。」

「それは、本当ですか？」

「ええ。便利上よく分権で乗ってる【オーズ】で言うけど。．．．」

く奏視点く

あの後、了子さんが色々説明してくれた。

何でもあの力は、感謝と恐怖両方の意味での資料があつたらしい。

正直どうでもよかつた。

どうして、今になって現れた！どうして、今日まで何もしてこなかつた！

奴を見た瞬間、私はそう感じた。

実際に話してみると、幼い少女の声でびっくりした。

．．．翼のやつは、間延びした喋り方が気に食わなかつただらうけど。

実際のところ翼は、切りにかかつたし。

でも、一つ気になる事があいつの声を聴いた瞬間、

どつかで聞いたような気がした。

いつたいどこで・・・

「奏！」

「うん。どうした翼？」

「私は、オーズを受け入れる事ができない。」

未確認は、正式にオーズと呼ばれるようになった。

そこから、ダンナ達の前では言わない悩みを、私は聞いた。

やっぱり、オーズとの戦いは避けられないな。

第④話：ライブと惨劇と最強コンボ

「セレナ視点」

私は今、「ツヴァイウイング」って言うアイドルの特番を見ながら、ルーミアさんの帰りを待っている。

ルーミアさん。三年目のネフイリムの起動実験の時に、出会った妖怪さんです。何でも人食い妖怪らしいのですが、人を食べてるところを見たくありません。

でも、全然成長してないから妖怪なのは、本当だと思います。基本自由気ままに動くルーミアさんですが、目的があります。

それは、昔の戦いで散らばったコアメダルの回収です。

あと、ガラとかが新たに作ったコアメダルも回収しています。
この国^{日本}に来たのもそれが、理由なんです。

へいよいよ、来週に迫りました！ツヴァイウイングのライブステージ。

今回お二方からメッセージを貰っています。＼

へへ ライブがあるんですね。

「セレナ。帰ったのだ」

「あ！ お帰りなさい。」

「ただいまなのだ〜！」

「そうそう、このライブに行くことになったから〜。」

「そうやって渡してくるのは・・・」

「ツヴァイウィングのライブチケット!?!」

「ど、どうしたんですかこれ?」

「もらったのだ。あと、会場で【ニル】と合流。」

「その後、簡単な打ち合わせをするから。」

「・・・どうやら、楽しむことはできないようです。」

ライブ当日

「私達は、バスに乗って会場に向かってます。」

「〇〇前〜 〇〇前〜」

「どうやら、着いたみたいです。」

「ちよつとお客様!」

「何なのだ〜?」

「代金の方を・・・」

「わ、私が二人分払います。行くなら言ってくださいいよ！」

「言ったよ。」

「え？」

ルミア視点

ニルは、どここゝかゝな？

あ！ニルって言うのは、前に言ってた妹分の事なのだ

ちなみにニルは、「グングニル」の略だったりするのだ。

「マスターこつち。」

「お久しぶりです。ニルさん。」

「ん。」

灰色のパーカーと頭に黒のジーンズ、

そして頭につけたリボンのように見える赤白の札が特徴の子でわりと無口。

ちなみに、さっきの「マスター」呼びは、彼女が僕の使い魔である証拠だったりする。

・・・一応言っておくと、彼女が使い魔になるまで色々あったからね。

く三人称視点く

会場では、本番前の最終チェックに入っていた。

忙しそうに、働くスタッフをよそに青髪の少女・風鳴翼と、

彼女の相方・天羽奏が話していた。

「翼・奏、ここに居たのか。」

そこに、風鳴弦十郎風鳴がやってくる。

「分かっていると思うが、今日はd」

「大事な日だろうか？分かってるって。」

「つぶ。分かっているならそれならいい。」

「・・・今日のライブが人類の未来をかけてるってことにな。」

「まあ、実験の事は、俺達に任せてお前たちは、楽しんで来い！」

「ああ！（はいー）」

ツヴァイウィングの二人の歌で、会場のボルテージが上がる。

観客の足をすり抜けていく一つの影がある。

客席の人たちが、舞台の上に居るツヴァイウィングアイドルに向かってペンライトを振る。

影は、黒と白の服を着た少女の膝に、バツタのように飛び移る。

「すごい……これがライブなんだ！」

始めてライブに来た、中学生が無意識に眩く。

バツタのような物を缶の形にして、闇の中にしまう。

会場の下では、鎧のような物が光り始める。

一曲目のラストを歌い始める、二人アイドル

黒と白の服を着た少女が、何者モノにも気づかれることなくいなくなる。

立ち入り禁止の扉の中に入る、灰色パーカーを着た少女。

観客が歓声を上げる中、一人の少女が不安そうにしている。

二曲目に入ろうとしたその時！

突然！爆発が起き、闇が縮まるように集まる。

「「「キャーキャーア！！」」」

最前列の観客と二人のアイドルは見た。

闇に閉ざされ、溶けていく怪物ノイースを

その下では、銀髪の少女が白い鎧を着て走っていた。
ライブ会場の壁が壊される。

銀髪の少女の前に、水色の髪に黄色い目、上半身が藍色、
下半身と手に持つ槍がワインレッドの少女が立つ！

瓦礫の土煙から、「タカゴリバ」のオーズが現れる。

「鎧を置いていけ。」

・・・抵抗するなら命乞いは、するな。 時間の無駄だ。」

不愛想に、水色髪の少女が呟く。

「言っておくけど、ノイズまだまだ出るから非難した方がいいのだよ」

オーズが、警告する。

「いったい何が・・・」

奏が、呟く。

「う、うわあああ」

理解が、追いついた人から逃げ出す。

「落ち着いて逃げて！」

少女を始めとする人たちが、混乱をせけるために動き始める。

「ちよせえ！」

「・・・なにそれ？」

軽口を叩きながら激戦を繰り広げる。銀髪の少女と水色髪の少女。

「あたし達も行くぞ！」

「でも、奏。叔父様からは、なにも！」

相方の言葉を聞きながら、シンフォギアを纏いノイズに立ち向かう。

その相方につき、翼も戦いに向かう。

「キヤーー！」

逃げ遅れた、中学生の少女が運悪く、足場だった瓦礫と共に落ちる。

「大丈夫か?!?! 早く逃げろお！」

奏が、中学生を守るため自身の武器アームドギアである槍を振り回す。

・・・が、運命は残酷

「つえー！」

「な、なに!?!」

壊れたの武器ガンツニールの破片が、守ろうとした少女に刺さる。

「・・・生きるのをあきらめるな！」

それが、少女の最後に聞いた言葉だった。

「はああー！」

「その子連れて、逃げるのだ〜」

オーズが、奏達に近づくとノイズを倒す。

「・・・オーズ。」

「何で！ あたし達は、あんたに一方的に攻撃をした。

なのにどうして！」

「理由なんて、必要ない！」

ただ、手を伸ばして助けられるなら、手を伸ばす。それだけなのだ〜

「とっておきだあ〜」

オーズは、ベルトのタカとゴリラのメダルを取り、

空いたところに、緑のメダルを入れ三枚の色を揃える。

ベルトをもう一度傾け、スキヤーン！

キン！キン！キーン ズツキユーン！

《クワガタ！ カマキリ！ バッタ！》

《ガクタガタガタ・キリツバ・ガタキリバツ！》

会場の下で戦う少女達だったが、上から降ってきた瓦礫で分断される。

「つち！ まあ、いいか。メダルの回収はできたし。」

そう言うのと、水色髪の少女の少女は、消えた。

「♪:Got to keep it real」

まるで、音楽のような振動が聞こえると、

オーズの姿は、緑の姿コングになる。

「うおおおおおおお！」

オーズは、力いっぱい叫ぶ。

そして、ノイズに向かって走り出す。

ガタキリバコンボ
昆虫の王の力が発動する。

「なに!? 分身の術だどー！」

翼の驚きどおり、オーズは分身をする。

「はあー!」 「ふんー!」

「おりゃ。」 「せい!」

分身能力「ブレンチシールド」によって作り出された、強さそのままの50のオーズ。角からの電撃で、腕から展開した「カマキリソード」で、バッタの足の蹴りで・・・それぞれが、ノイズを倒していく。

巨大なノイズが、普通サイズのノイズを生み出すも、

コンボを成立させたオーズ50体の人海戦術により、減っていく。

もはやそこは、オーズの独壇場。あつという間に、巨大ノイズ「強襲型」ギガノイズのみとなる。

《 《 スキャニングチャージ！ 》 》 》

50体のオーズが、必殺技の体制に入る。

「「セイヤアアア―！」」

オーズによる、50体分のライダーキック【ガタキリバキック】が炸裂！ノイズを撃破する。

風に運ばれた新聞の切れ端、そこには・・・

〔ライブの死者：約900人〕

そのうちノイズによる死亡者は、1／3 ！? 〕

003：つながる手と欲望の王

第1話：観察と猫と不穏な空気

～三人称視点～

ある日の夕方

山付近の民家に、ノイズが出現。自衛隊が応戦するも、全く歯が立たないでいた。

「通常兵器では、効果なしか・・・」

そこに、一台のヘリがやって来る。ヘリのドアが開くとそこから二人の女性が飛び

降りてくる。

「CroitzalronzellGungnirzizl」

「Imyuteus amenohabakiritron」

二人は歌・・・いや、詠唱を口ずさむとシンフォギアと呼ぶ鎧を身にまとう。
天羽々斬あめのはばきりのシンフォギアを纏う、風鳴翼

ガングニールのシンフォギアを纏う、天羽奏

この二人の到着で戦場は、一気に変わった。

先ほどまで、手が出せなかったノイズをあつという間に倒していく。

「す、すごい！これが二課のシンフォギア……」

誰かが、呟いた言葉が響く。

そして、その光景を見つめてる二つの影が……

赤いタカのような機械と、それにぶら下がる緑のバツタのような機械が

「セレナ！ タカちゃんとバーくんから送られた映像はどのなのさ？」

ある部屋の二室で、二つのサポートメカ「カンドロイド」から、

送られてきた映像を見ていたセレナに、ルーミアが猫を抱えながら聞いてくる。

「……あのさ、ルーミアさん。」

「どうしたのさ？」

「その猫、どうしたんですか？」

「今朝あった少女が助けてたのを、受け取った。」

「マスター、その子のこと。 気に入った？」

ルーミアの言葉に、ベットに寝ころんでいたニルが反応する。

「気に言っただけより……」

「面白いことが起きそうな予感かな〜」

「何ですか、それ？」

「セレナ。」

「はい？」

「気にしたら負け。」

「あ、はい。」

「ニャー」

「ところで、この子の名前どうしようか〜？」

「飼うの？（ですか!?!）」

「その気なのだ〜」

それからしばらく、三人?で猫の名前を決める事になったのだった。

ちなみに、「ソラ」に決まった。

ノイズ災害で、人が住まなくなったゴーストストリート。そこにあるBARだった場所。

そんな場所に、誰もが美人と言うだろう薄い紫の服を着た女性が入って行く。

荒れ果てた店内の中、オレンジのシャツが目立つ男性がいた。

「久しいな、【グラ】！」

「本当にね。」

ところで、【ゲール】最近どうなの？」

「ふん！ 日本にオーズの嬢ちゃんがいてセルメダルすらたまらねえよ！」

「オーズの嬢ちゃんが持つメダルは、10枚目奴を除くと2枚。

残りの3枚は、いまだ見つからないしよお。」

「そうなの・・・」

「だったら！この【バルベルデ共和国】が、科学的に再現したコアメダルを取り込んでみる？」

そうやって、手に持っていたジュラルミンケースを開ける。

「銀フレームのコアメダル？」

「ええ。私があなたに会いに来たのも、元々メダルこれについて話したかったからなの。」

「面白れえ！ けどそれ、どこで手に入れたんだ。」

「私の子供が襲った輸送者の中から、全部で24枚のメダルが出てきたのよ。」

「ふうくん。 そうだな・・・」

「俺のコアメダル偽物と、こいつの偽物コアメダルを貰えるか？」

「ええ。 良いわよ。 それじゃ、私アメリカに戻るから。」

「なんだよ。 もう少しゆつくりしていけばいいのに・・・」

「それもいいのだけど。 なかなか良い、「欲望」を持つ研究者いるのよ。」

「オーズの嬢ちゃんに感づかれないようになあ。」

「ええ、分かってるわ。 それじゃ、また今度。」

新たな脅威が、人類に牙を向ける！

第2話：初回特典と逃走と覚醒の鼓動

～三人称視点～

【リディアン音楽院】

私立学校で、小中高一貫の学校。

音楽教育を中心としたカリキュラムで、学費は安いらしい。
放課後の教室に、残っている生徒がいた。

「翼さんに完璧におかしな子だっと思って思われたあ〜・・・。」

そう言っつて机に突っ伏すのは、今年入学した【立花たちばな響ひびき】

「間違っつていないから良いんじゃない?」

響の言葉にこたえるのは、彼女の幼馴染【小日向こひなた未来みく】

「そんな〜」

「・・・それ、もう少しわかりそう?」

「うん。」

未来は、課題をしながら響と話す。

「そっか。今日翼さんのシングルCDの発売日だったね。」

でも、今時CD?」

「うるないなあゝ 初回特典の充実感が違うんだよ、CDはゝ」

余程好きなのだろう。

さつきまでの落ち込み具合なんてなかったように生き生きとしている。

「だとしたら、急いだほうが良いんじゃない?」

奏さんのシングルCDの二の舞を踏む事になっちゃうよ。」

「響の事だから予約して無いんでしょ。」

「っあー!」

その言葉を聞き響は、急いで店に向かった。

その背中を横見た未来は、「やっぱり」っと呟いたそう。

・・・数時間後

響は、助けた少女と共にノイズから逃げていた。

「そんな! うそ・・・」

「お姉ちゃん・・・」

響たちの前には、川。来た道には、ノイズ。

少女は、響に抱き着いている。

「大丈夫、お姉ちゃんが一緒にいるから……」

少女を安心させるようにつぶやくと、川に飛び込む。

幸い、ノイズは追いかけては来なかった。

その頃、ルーミアは……

《タカ！パンダ！ワニ！》

亜種「タカパンワニ」の姿で戦っていた。

〔♪：Regret nothing～Tighten Up〕

「パンダクロー」や「ソウテッドサイザー」で強化した蹴りで迫りくるノイズを撃破していく。

《シャチ！パンダ！チーター！》

続いて「シャパンター」となり、

槍となり攻撃してくるのを、「シャチヘッド」からだす水流で応戦し、

「チーターレグ」の力で高速移動して、パンダクローで切り裂いていく。

シエルターから遠ざかり、工場と思われる場所まで逃げてきた。

しかし、屋上に逃げてきたため追い込まれてしまう。

「死んじやうの……」

少女が、涙をこらえながら呟く。

「大丈夫、死なせないから……」

正直言つて響は、心身共に限界だった。

それでも、あきらめないでいるのは、二年前のツヴァイウイングのライブの時、

助けてくれた奏の言葉があつたから。

少女を元気づけるため、自分を奮起させるために、響は言う。

「生きるのを、諦めないで！」

その時だった、響の古傷から光り出したのは！

「Ball^{バル}wis^{ワイ}sy^{シヤ}all^ル Nes^ネce^ケll^ル gun^{ガン}ni^ニr^ル t^トron^{ロン}」

「ぐううう うあああー……！」

まるで、細胞が……何かに浸食されるように苦しむ響。

彼女の意思とは、無関係に体内から鎧が現れ装着する。

光が晴れると、白い鎧纏う響きがいた。

「えー！ な、なにこれ？」

私、一体どうなっちゃっているの!?

「お姉ちゃん、かつこいい。」

それぞれの、思ったことを言う二人。

一方。二課では・・・

「高出力エネルギーを検知!」

「波形を照合、急いで!」

「・・・まさかこれって、アウフヴァアツヘン波形!」

誰もが、その真実に驚きを示す。

しばらくして、モニターに一つの文字が表示される。

・・・【GUNGNIR】と。

「ガングニールだとお!」

司令の弦十郎が叫ぶ。

「そ、それって奏の!?!」

翼が反応し、部屋を出る。

「おい! 待て、翼。」

奏が翼を追いかける。

他の人たちも、驚きを隠せないでいる。

戻って響たちは今、ノイズから逃げていた。

変化した身体能力に戸惑いながら逃げていたが、いよいよ躲せなくなり拳を前の出してしまう。

「つえ?」

しかし、響は灰化せず、ノイズのみ灰となった。

「私が、倒したの?」

響が困惑していると、後ろかバイクが二台やって来る。

片方がそのまま、奥にいる強大な巨人型ヒューマノイドノイズノイズに突っ込む。

途中で飛び降りたのを視界に入れた後、もう一台のバイクが響たちの近くに止まった。

「取り合えず君は、その子を守って!」

「奏さん!」

奏は、響の言葉に頷きバイクから降り、空中にいる翼と共に詠唱を紡ぐ。

「Crooittzalaronzellgungnirzizzl」
 「Imyuteus amenohabakirritron」

響と同じ鎧、シンフォギアを纏うと歌いながらノイズと戦い始める。

「♪：逆光のフリーゲル」

奏は槍、翼は剣を持ちノイズと戦う。

投擲した槍を複製した技「STAR DUST∞FOTON」で、広範囲のノイズを撃破する。

残ったノイズを、脚部に展開したブレードを

バーニアの縦回転で切り裂く技「無想三刃」で倒していく。

「すごい……」

「！ お姉ちゃん、あれ！」

響が、巨人型ノイズが響たちに迫る。

「ぐっ！」

響が行動しようとした時。

巨人型ノイズに向かって、赤・黄・緑のリングが空中に現れる。

そのリングを通る影が一つ。【タトバコンボ】のオーズだ！

「♪：変身・オーズ」

「セイヤアアアア……！」

【タトバキツク】が巨人型ノイズに風穴を開ける。

オーズが立ち上がると同時に爆発する。

「今度は、ライブの時の!?!」

「もう、大丈夫なのだ〜！」

そう言いながら、しやがみ込み少女の頭をなでるオーズ。

立ち上がり、ノイズの方を向く。

オーズがやって来てからノイズの眼中には、オーズしか映ってない。

「はあー！」

【トラクロー】から、真空刃を繰り出す。真空刃に当たらなかったノイズがオーズに迫る。

【ラインドライブ】から得たエネルギーで、強化した蹴りで応戦する。

攻撃しながら、ベルトの真ん中と左（オーズから見て）のメダルを変えてスキャンする。

《タカ！カマキリ！カンガルー！！》

「はあー！ はあー！ たあー！ おりゃー！」

腕と足をそれぞれ、瞬発力の優れた【タカキリガル】に変わる。

三人の活躍で、あつという間にノイズがいなくなる。

「オーズ！ 今日こそは、ついて来てもらおうぞ！」

オーズに剣を向け、にらみつける翼。

奏は、様子見に徹しているようだ。

「まっってください！」

そこに、響が割って入る。

「この人は、私達を助けてくれたんです。」

「・・・」

それをよそにオーズは、闇に消える。

「しまった！」

「つえ！ 消えた・・・」

数時間後・・・

「何でえええー！ー！ー！」

響が手錠を付けられながら、連れていかれるのを空から見ていたルーミア。

「あの子・・・映司君タイプの人間なのか。」

そう呟くルーミアの脳内には、自分と翼のあいだに立った時に震えている響が思い出されてた。

第3話：食事と説明と変身

（ニル視点）

私達は今、駅前にある「ふらわー」って言うお好み焼き屋に来ていた。

「ルーミアさん！ニルさん！これ、おいしいですよ。」

「そうだね。」

セレナの言うとおりこの店は、あたり。

「・・・」

マスターは、ワインレッドの縁のメダルを見つめている。

「ルーミアさん。質問いいですか？」

「・・・うん？ 何なのだ？」

「ルーミアさん達が使ってるメダルって何なんですか？」

「欲望。」

「っえ？」

「コアメダルもセルメダルも元は、人間の欲望なのだ。」

マスターは、何枚かのメダルを取り出すとセレナに説明する。

「この、金縁に色が付いているのが「コアメダル」で、

セレナにも渡している銀一色のが「セルメダル」なのだ」

「確か、コアメダルで変身するんだしたよね。」

「そう。」

「ちなみに、「イザーク」が開発しているメダルシステムは、セルを使うのだ」

「プロトバースも、その一つ。」

セレナの疑問に食べながら、答えていく。

「このメダルは、何ですか？」

「これ？ これは、「アルマジロ」のコアメダルなのだ」

見たこと無かったか？」

「はい。そう言えは、ルーミアさんがさつき持ってたメダルは何ですか？」

セレナの質問に合わせて、ワインレッドのメダルを取り出す。マスター。

↳ 響視点↳

私はいま、リディアンの地下にある二課本部にて説明を受けています。

え〜つと・・・

私が昨日纏ったのは、聖遺物？・・・シンフォギア？

それで、歌でえ・・・

「あのお・・・」

「どうぞ、響ちちゃん。」

「全然、分かりません。」

「だろうね。」

昨日二課に連れて来られる前に、あつたかい物をくれた人あおいさんがそう言う。

「まあ、なんだ。」

シンフォギアは、歌うことでノイズを倒せる鎧つて事を覚えてな！」

奏さんが、簡単に説明してくれました。

「あと、聖遺物からシンフォギアを作り出す唯一の技術、

櫻井理論の提唱者がこの私であることだけは、覚えてくださいね。」

「それ、大事か？」

「大事な事よ、奏ちちゃん。」

奏さんと了子さんが話している中ふつと思つた。

私、奏さん達が持っている結晶のようなペンダントや聖遺物を持ってないのに纏え

た事に・・・

「あのおく、私、聖遺物を持ってません。なのに何故？」

「いや、響。君は、ガングニールを持っている。」

「どう言う事、奏？」

「ダンナ。」

「うん。これが何なのか君には、分かるはずだ。」

そう言つて、指令室のモニターに映し出されたのは、私のレントゲン画像だった。

「はい、二年前の怪我です。ライブあそこに私もいたんです。」

「っ！」

「ああ、覚えているよ。」

翼さんは信じ慣れないように驚いて、奏さんは思い出すように目をつむりました。

「心臓付近に複雑に食い込んでいるため、手術でも摘出不可能な無数の破片。」

調査の結果と奏ちゃんの証言の結果、

【第三号聖遺物：ガングニール】の破片で間違いなしよ。」

「！」

「響、すまん。」

「っえ！ か、奏さん!?!」

了子さんの説明を聞くと、翼さんは指令室を出ていつてしまいました。

そして奏さんは、私に頭を下げました。

「あたしが、不甲斐ないばかりに響を巻き込んでしまつて。」

「私、奏さんに会つたら言いたいことがありました。」

「助けてくれて、命を救つてくれてありがとうございます!」

「!? ははは、どういたしまして・・・」

「その言葉、オーズにも言つておきな。」

「オーズ?」

「昨日、君が遭遇した三色の鎧を着た奴の事だ。」

司令の人が私にそう説明してくれました。

「そう言えばあの人は、何者なんですか?」

「俺達も、よく分かつてないのだが・・・」

「昔から、世界各地で存在が確認されてて、様々な生き物の力を使う事。

近くにいるノイズが、オーズにしか興味を示さなくなる事。

そして声や言葉使いから、まだまだ幼い子と推測される事だ。」

「味方なのでしょいか?」

「そうであつて、欲しいな。」

色々と、大変そうだな。 あ!

「あのく、この事は誰かに話しちゃいけないんでしょうか？」

「君が、シンフォギアの力を持っていることを何者かに知られた場合、

君の家族や友人、周りの人間に危害が及びかねない。命に関わる危険すらある。」

「命に、関わる・・・」

「俺達を守りたいのは、機密ではない。人の命だ！」

「そのためにもこの力のことは隠し通して貰えないだろうか？」

「あなたに秘められた力は、それだけ大きなモノだつてことを分かつてほしいの。」

「今の人類で確実にノイズに対抗出来るのは、シンフォギアだけなんだ。」

「ああ。今一度、日本政府、特異災害対策機動部二課として、

改めて協力を要請したい。立花響くん。

君に宿ったシンフォギアの力を、対ノイズ戦のために役立ててはくれないだろうか？」

「私の力で、誰かを助けられるんですよね・・・」

「分かりました。」

「あの！私、翼さんと話して来ます。」

くニル視点く

「・・・と、言う訳。分かった？」

「はい！」

思ったより、長話になっちゃったや。

その時だった、マスターの目が紫に光ったのは・・・

マスターの体内には、紫のコアがある。そのコアが欲望に反応して、紫に光るらしい。

「ニル！」

「ん。」

会話は、必要ない。

「私、先に帰ってますから。頑張ってください！」

「会計は、まかせたのだ。」

私は、マスターと共に店を出る。

人がいないところに行くと、マスターは「スペルカード」を使う。

ー陰符「シャツテンヴァンデルン」ー

私達は、マスターの闇に包まれる。晴れると、ノイズが現れようとしている場所。

さっきのスペルカードは、瞬間移動に近い動きで、相手に攻撃する。

その応用で、移動手段として使っている。

「いくよ、ニルー！」

「うん。」

マスターは、黒の長方形に銀や水色の模様が入っている「オーズドライバー」を、私は、銀の長方形の台座の上に金のギザギザ円形。

中心に黒のくぼみがある「ポセイドンドライバー」を腰に当てる。

そして懐から、三枚つつメダルを取り出す。

マスターは、まず両端にメダルを装填する。次に真ん中にメダルを装填。

その後、スキヤナーを手に取り、メダルをスキヤンしながら手をクロスさせる。

私は、私から見て右上のスリットに水色のメダルを装填。次に左上に藍色のメダルを装填。

「変身！」

と言いつつマスターは、スキヤナーを胸の前に。

その時反対の手は、真ん中に合わせて形を変えている。今回は、トラの手。

私は、赤色のメダルを最後のスリットの装填。メダルの配置が逆三角形になる。

《タカ！トラ！バツタ！》

《サメ！クジラ！オオカミウオ！》

私達の周りを、メダルがスロットのように回る。

ベルトとスキャナーの音に合わせられて、メダルが止まり、一つになりながら胸に来る。

《タートローバ！タ・ト・バ タ・ト・バ！》

音楽（に聞こえる振動）と共に私たちは、肉体が変化し【仮面ライダー】と呼ばれる姿になる。

・・・私は、マスターにもらったお札お守りを髪に付けたまま変身したから、

【ライダー少女】と呼ばれるの姿らしい。 どうでもいいけど。

「よし。 行くのだ〜」

マスターの声に合わせて、出始めたノイズに走り出す私達。

第4話：混戦と怪人と攻防のコンボ

～三人称視点～

「ふっ!」

「はっ!」

リディアン学園の近くで、ノイズが現れていた。

逃げ遅れた人々を守るように、大型剣と槍を振るう二つの影があった。

ルーミアが変身したオーズと、ニルが変身したポセイドンだ。

《タカ!ウナギ!チーター!》

「はあ!」

【タカウター】となったルーミアが、二本の【電気ウナギウィップ】を

駆使しノイズを撃破していき、逃げ遅れた人の元に【チーターレッグ】の力を使い助け出す。

「ふん。」

ニルも、【ディーペストハーブーン】と呼ばれる武器でノイズを撃破していく。

逃げ遅れた人がいなくなるころに、ツヴァイウィングの二人がやって来た。

「今頃か。」

「CroitzalronzellGungnirzizzl」

「Imyuteus amenohabakiritron」

さらに、遅れて響がやって来る。それぞれが、思い思いにノイズと戦い混戦となる。

「何ですか、アレ？・・・鎧武者？」

響の言葉に皆が反応し、響が指さす方向を見る。

そこには、長剣を持ち、左手はカニのようなハサミを持ち、

銀の鎧と黒のマントを身に着けた怪人が、存在を示すように歩いてくる。

「どっかで見たとような気が・・・」

「貴様、何者だ！」

翼の質問に対して、剣を向ける怪人

「貴様がその気なら！」

「待ってください！翼さん！」

翼の剣劇を受け流し反撃する怪人。

翼の剣さばきが【動】ならば、怪人の剣さばきは【静】だろう。

「翼が、押されているのか!？」

「どけ、私がやる。」

ノイズと戦っていた、ニルが怪人に瞬間移動に近い動きで迫る。

しかし、ニルの動きでも怪人はついて来ていた。

「あの動きについて来ているんですか!？」

「・・・ノブ君」

ルーミアが眩きと共に、薄い茶色系のコアメダルを3枚取り出す。

ゆつくりとメダルを入れ替え、スキャンする。

《ダンゴムシ!グソクムシ!アルマジロ!》

《ダン・ダン・グアル! ダン・グ・アル!》

「はあ!」

【ダングアルコンボ】にコンボチェンジしたオーズ。

迫って来ていたノイズを、空中回転蹴りでカウンター。

着地と同時に前転でノイズに近づき回し蹴りをする。

鎧武者の怪人に、空中で一回転してからのかかと落としをする。

剣で防がれるも、地面を転がりながら距離を取る。

怪人は、追いかけてくるが足払いで立ち上がる時間を作る。

「不完全体とは、一味も二味も違うか」

先ほどから回転をよくするがこれには、意味がある。

ダングアルコンボは、丸イメージ出来る動きをする事で強度が上がる。

上がった強度で、攻撃を防ぎ、攻撃を与えるコンボなのだ！

「ニル。ノイズ方は、任せただけ」

「分かった。」

ニルにしか聞こえない声で会話した後、「鎧武者怪人」の方を向く。

一方、ノイズは合体し、二体の巨大ノイズになる。

くルーミア視点く

さてと、格好つけたけどこいつの動きは、ノブ君の動きなんだよね。

「やるだけ、やるか」

「！」

奴の動きに合わせて僕は、回転しながらの回避を中心に動く。

横に剣を振れば、「アルマジロレッグ」のジャンプ力で躲す。

左手のハサミがくれば、「グソクムシアーム」の装甲で防ぎ円を描く動きで払いカウン

ター。

正直、自我が無い分まだ、戦いやすいのだ。

とか言つてら剣にエネルギーチャージし始めたのだ。

「だったらー！」

僕は、闇の中からメダジャリバーを取り出しメダルを1枚入れる。

そして、スキヤナーでスキャンする。

《シングル・スキヤニングチャージ！》

「はあぁー」

剣と剣がぶつかり合う。僕は、剣をはじきその勢いを利用して回転、

腹の部分に刃を当て力を込める。

「セイヤアアアー！」

しかし、倒しきることは出来なかったのだ。

「逃げられた！」

ノイズの方を見ると、ニルが槍から斬撃波だし、翼がでっかい剣で巨大ノイズを倒し

ていたのだ。

「あ、あのお〜」

うん？ 最近、縁があるのかよく見る人間子が話しかけてきた。

「オーズさん！ 二人前のライブの時は、ありがとうございました！」

「どういたしましてなのだ」

「あいつは？」

「ごめん。逃げられたのだ」

「あ！ 奏さん！ 翼さん！」

今は足手まといかもしれないけれど、一生懸命頑張ります。

だから、私と一緒に戦ってください！

やぱり、映司君タイプの子なのだ・・・

「そうね、私とあなたで戦いましょうか！」

「っえ！」

「！」

「翼！」

なんか、大変な事になって来た気がするのだ。

～三人称視点～

「何をやっているんだ！」

「青春真っ盛りって感じね。」

二課で、現場の様子を見ていた弦十郎は、無言で動き出す。

「司令、どちらへ！」

「誰かが、あの馬鹿者どもを止めなきゃいかんだろうよ！」

現場では、翼と響が戦って・・・いなかった。

「何のつもりだ。」

「・・・」

ニルが響の前に立ち、翼をにらみつける。

「待ってください！ どうして？」

響の言葉を遮るように、肩に手を置いたオーズ。

「オーズさん？」

「翼は、響を受け入れる事が出来ないんだと思う。」

「奏さん、どういう事ですか？」

今度は、奏が響に話しかける。

「簡単に言うとな、【アームドギア】・・・あぁー、

覚悟がない奴が、戦う事に怒ってるんだらう。」

「二年前は、君もあっち側だったよ〜」

「う、うるさい!」

「それよりあんたは、いいのか。」

「何が?」

「あの水色髪の子、仲間なんだろう?」

「問題ないのだ〜。」

「なんで、そんなにのんきなんですか!」

会話は、そこで止まった。

なぜなら、翼達が動き出したからだ。

翼が【天ノ逆鱗】の体制を取り、ニルが【ディープスパウダー】の体制を取る。

「そこまでだ!」

ここに、一人の男性がやって来る。

「叔父様!?!」

「・・・誰?」

二課の司令、風鳴弦十郎だ。

「つね。問題なかったでしょ。」

「あんた・・・」

「あつ！ そうそう、」

その続きの言葉を奏だけに伝えて、ニルの方に歩きます。

「・・・オーズ、こうして会うのは、初めてだな？」

「そっちが一方的に知っているだけなのだ」

「それもそうだな。」

「俺は、風鳴弦十郎だ。 悪いが・・・」

「やだなのだ」

「即答か。」

「なら、一つだけ。 お前は、人類の敵か？ 味方か？」

「わはー 何だろうね？」

その言葉と共に、ルーミアとニルは、闇に消えた。

第5話：計画と思いとオレンジ色

↳三人称視点↳

暗い部屋に一人の女性が居た。

「オーズ……」

「いや、宵闇の人食い妖怪め！」

またしても、私の計画を邪魔するのか!!」

金髪の女性が資料に目を通しながら、呟く。

「邪魔させてなるものか！ 私は、あのお方と」

「お前の欲望、解放してやる！」

女性しか居なかった部屋に、男性の声が響く。女性が振り向くとそこには、

爬虫類を思わせるオレンジ系色の怪人がセルメダルを女性に向けていた。

「……っは！」

「寝ていたかあ……こんな時間か。」

【融合症例第一号：立花響】お前は……」

場所は変わり、荒野のような場所。

《タートーバ！タ・ト・バ タ・ト・バ！》

「はあ！」

「ふん！」

オーズと鎧武者怪人が、戦っていた。

「っ！ 本物の信長を相手にしてるみたいだなあ〜」

《ライオン！トラ！コンドル！》

「はあああー！ー！」

「ラトドル」になると、「ライオネルフラッシュャー」を光らせる。

怯んだところに、「トラクロー」と「ラプタードエッジ」で切る！斬る！切り刻む！

黄色と赤の斬撃が、鎧武者怪人を襲うもあまり効いていないようで反撃を受ける。

「うわあ！」

少しと遠くに飛ばされて倒れこんだオーズ。そこに追撃の一振りを下ろす！

「? . . . !」

剣は、オレンジの盾に防がれる。

「へへへ。」

《ライオン！カメ！コンドル！》

振動音が遅れてくる。聞こえる。

まるで今の姿、「ラカドル」を主張するかのごとく。

「ふうー！」

力任せに、鎧武者怪人を吹き飛ばす。

形成は変わり、今度はルーミアがカウンター主体の攻撃になる。

「ふんー！」

鎧武者怪人から、稲妻が放たれる。

ルーミアは、両腕の「ゴウラガードナー」を合わせた「ゴラシールデュオ」で防ぐ。

しかし、煙が晴れると鎧武者怪人は、いなかった。

タカー！

「お願い、お願いタカちゃん！

鎧武者怪人を・・・ノブ君を探して！」

懐から出した、「タカカンドロイド」に探索を頼むルーミア。

タカカンドロイドは、頷く探索に向かう。

「これ以上、やらせる訳にはいかないよな〜」

そう言っつて、闇の中から二枚の紙を出す。

そこには、家紋にバツ印が付けられていた。

数時間後・・・

「ありがとう……ごめんね」

響は、電話を切り携帯をしまう。

「Ball^バwis^ルsyal^{ウイ}l^{シヤ} Nes^ネcel^スl^ケ gun^ガgn^ンir^ニl^ル t^トron^ロ」

ガングニールを纏う響。彼女は戦う、

タイミング悪く出てきたノイズに、約束を果たせなかつた欲望^{怒りに}！

第6話：怒りと鎧と即席タツグ

（三人称視点）

——「♪：撃槍・ガングニール」

（中に一回り大きな反応が見られる。

まもなく翼も到着するから、それまで持ちこたえるんだ。くれぐれも無茶はするな！）

「分かっています。」

通信機から聞こえる弦十郎の声にこたえる響。

不慣れながらも、必死にノイズと戦う。

ブドウのようなサツカーボールサイズの物を身に着けるノイズが、人間味にある動きで逃げ始めた。

「私は、私にできることをします！」

響は、改札を飛び越えノイズを追いかける。

ノイズは、ブドウのような物を飛ばす。それが地面を跳ね、爆発を起こす。「っ！」

瓦礫が響に降り注ぐ。「ブドウノイズ」は、その隙に逃げる。

「・・・見たかった、」

瓦礫の下敷きになった響が眩く。瓦礫から響が飛び出す！

「流れ星、見たかったあああ！」

親友との約束を果たせなかった、怒りのままノイズを荒ららしい動きで蹴散らす。

「未来と一緒に、見たかったあああ——！」

「うおおああ——！」

怒りの雄叫びを上げ、ノイズを追いかける。

ブドウノイズは、響の接近を感じると動き出す。

「あなた達が・・・」

その言葉と共に、壁に拳を叩きつける。壁にひびが入っていく。

「誰かの約束を犯し！」

ノイズは、実を響の方へ投げる。実は、ノイズへと変わる。

「嘘のない言葉を！争いのない世界を！なんでもない日常を！

剥奪すると言うならば！」

もはや戦いではなく、自身の怒りをノイズにぶつける響。

獣のような戦い方で、ノイズを破壊していく。

ブドウノイズの実による攻撃が爆発する。

何とか腕をクロスする子で防ぐ。何とか冷静さを取り戻した響。

その隙に、線路へと逃げるノイズ。

「待ちなさい！」

ノイズは実を天井に投げ、天井に穴をあける。

響が悔し気に、睨みつける。夜空には、一筋の光が。

「流れ、星？」

光は、青い斬撃と共にノイズを切り裂く。

そのまま公園に降り立つ。光の正体は、風鳴翼だ！

地上に出た響共に、残りのノイズと戦う。

数分前奏は・・・

〈奏、○○駅にノイズが現れた。〉

オーズや水色の少女は、まだ来ていないようだ。〉

「分かった、ダンナいm」

「キャーキャー！」

「わりの、行けそうにねえ！」

奏は、一言言うとお通信を切る。

奏が悲鳴の元に着くと、鎧武者怪人が女性に向かって紙を投げつけていた。

「おい！ 待て！」

「Croitzal ronzeil Gungnir zizzl」

「♪：君ト云ウ 音楽テ 尽キルマデ」

奏は、詠唱を歌いシンフォギアを纏う。

アームドギアの槍を振るうも防がれる。

「つぐ！ 実際に戦ったて初めて分かった、こいつ強い！」

タカー！

「おん？ 鳥と・・・響？」

奏が戦っていると、タカカンドロイドに案内されてやって来た、

オレンジの髪に赤白のお札を付け、灰色パーカーを羽織っている少女・ニルがやって

来る。

立ち止まって、鎧武者怪人が投げた紙を見る。そこには、家紋にバツ印が付けられ

ていた。

「マスターの予想どうり、復讐か・・・」

眩きながら、奏たちの方を向き、ポセイドンドライバーを腰に当てる。ベルトが自動で巻かれ、ポケットから出したメダルをはめていく。2枚目を入れた後、最後のメダルを持つ手を胸の前に持つてくる。

「・・・変身。」

掛け声と共に最後のメダルをセツトする。

《サメ！クジラ！オオカミウオ！》

「おっと。え！マジかよ・・・」

ニルの文字道理の変身を見て驚く奏。

それを気にせず、眩くニル。

「・・・リベンジだ、信長。」

「は！… 信長？こいつがあ！」

奏の言葉を無視して、ワイレンレッドの槍を手に鎧武者怪人に向かう。

「おい！… あくもう！」

奏もそれに続いていく。

即席のタック、それも対立に近い関係の二人。

しかしながら二人の動きは、互いの隙を補うように戦っていた。

二人のコンビネーションに少しづつ押されていく、鎧武者怪人。

「案外、行けるな！ 私達。」

「・・・ニル。」

「あ？」

「名前。」

「あたしは、天羽奏だ！」

「知ってる。・・・くる。」

鎧武者怪人は、二人に対して稲妻攻撃を仕掛ける。

ニルは槍にエネルギーをため、「ディープスパウダー」を発動！

剣から放たれる稲妻と槍から放たれる水のエネルギーがぶつかる。

属性が不利なため、ニルが押される。・・・が、その隙に奏が動き出す。

【STAR DUST∞FOTON】で鎧武者怪人に、複数の槍をぶつける。

「ぐうう」

鎧武者怪人は、数枚のセルメダルを落しながら撤退する。

「待て！」

奏が追いかけてようとするも、すでにかかなりの距離が離れていた。

「おい！ なにメダルを拾ってるんだよ！逃げられたぞ！」

「・・・」

「どこ、行くんだよ。」

奏の言葉を無視して、メダルを拾い終えたニルは、黒い自販機に向かう。

「そりゃー、戦いの後で喉が渴いてるかもしれないけどn」

「違う。」

「つえ？」

ニルは、黒い自販機「ライドベンダー：マシンベンダーモード」にセルメダルを入れる。

《タカ缶！》

ニルは、何事もなく次々と先ほど回収したメダルの一部を入れていく。

《ウナギ缶！ バッタ缶！ タコ缶！ クジャック缶！ プテラ缶！

プテラ缶！ ウナギ缶！ クジャック缶！ バッタ缶！ タコ缶！》

最初のタカカンドロイドを合わせて、それぞれ二体ずつにする。

「信長探し、よろしく。」

ニルの言葉を聞くと、散らばるカンドロイド達。

「おい！ アレなんだよ。」

奏がシンフォギアを解除しながら、ニルに質問をぶつける。

「・・・サポートメカ。」

変身を解除したニルが呟く。

新たにセルメダルを、ライドベンダーに投入するし、中央の黒いボタンを押す。すると、自販機だったライドベンダーは、変形してバイクになる。

「うそ、だろ……」

奏が驚いているうちに、ヘルメットをかぶったニルがバイクで去っていく。

場所は戻り、響達へ

ノイズを倒し終わった響は、翼に近づく。

「私だって、守りたいものがあるんです！ だから……」

「……」

胸の秘める思いを紡ごうとする。

しかし翼は、響の言葉に反応せず、アームドギアの大剣天を構える。

「っ！」

翼の行動拒絶に息をのむ響。

どちらも、言葉を発しないまま時間が経つ。

「だからあ？　で、どうすんだよお!？」

「っ!？」

「へえ?」

そこに第三者の声が響く！

二人は、声の聞こえた方を向く。　並び立つ木々の間から少女がやって来る。

少女は、白い鎧を身にまとって、顔にはバイザーを付けていた。

「っ!」【ネフシユタンの鎧】!？」

「へえ?　てことはアンタ、この鎧の出自を知ってたんだ?」

感心したように呟く、少女。　それに対して、冷たく呟く翼。

「忘れるものか・・・」

「二年前、私達の不始末で奪われたものを忘れるものか!」

翼は剣を構え、少女は口元に笑みを受けながら構える。

少女の右手には、杖のような物を構える。

「やめてください翼さん!　相手は、同じ人間です!」

響が、翼にしがみつきながら止めに入る。

「戦場で何を馬鹿なことを!」

翼と少女の言葉が重なる。

「むしろ、あなたと気が合いそうね。」

「だったら仲良くじゃれ合う、かい！」

少女は、肩か伸びるピンク色の物を鞭のように振るう。

翼は響を押し飛ばして躲し、反撃に「蒼ノ一閃」を放つ。

少女は、迫りくるエネルギー刃を鞭ではじく。

驚きながらも、近づききりにかかる翼。少女は、難なく避け、受け止める。

余裕がある少女に対し、翼は困惑と焦りが出始めた。

「が！」

少女の蹴りに吹き飛ばされる翼。

「翼さん！」

「お呼びではねえんだよ！ こいつらの相手でもしてな！」

少女の持つ杖から、光を放つ！

第7話：操る杖と魅せる攻撃と灼熱コンボ

〜三人称視点〜

「がー！」

ネフシユタンの鎧を纏った少女の蹴りで吹き飛ぶ翼。

シンフォギアと完全聖遺物の差を感じ、歯噛みをする。

「ネフシユタンの力だと思わないでくれよなあ？」

あたしの天辺はまだまだこんなもんじゃねえぞお！」

少女が自在に鞭を操り攻撃する。それを何とか躲す翼。

劣勢の翼に響が叫ぶ。

「翼さんー！」

「お呼びではねえんだよ！ こいつらの相手でもしてな！」

少女は余裕の笑みを浮かべながら、右手に持つ杖から光を放つ！

光が地面にぶつかるとそこから、ノイズが4体現れる。

「ノイズが操られている!?!」

困惑する響をよそに、長身の鳥のようなノイズが響に迫る。

クチバシのような場所から、粘性の液体を響に向けぶちまける。

「うわぁ！ そんな！嘘！」

身動きが効かない響に近づくと、少女。

「その子にかまけて私を忘れたか！」

そこに翼が一太刀入れるが、受け止められる。

そこに足払いをかけ体制を崩し、追撃の斬撃を放つ。

少女は、寸前で回避、続けざまに放たれた回し蹴りを受け止める。

「お高くとまってるな！」

そのまま翼を地面に叩きつけ、踏みつける。

「のぼせあがるな人気者！」

誰も彼もがお前に構ってってくれるなどと思ってんじやねえ！」

「くっ！」

「この場の主役だと勘違いしてるなら教えてやる！」

狙いははつなからこいつを、かつさらうことだ。」

少女は、響を指さしながら言う。

「え？」

突然の事で困惑する響。

「鎧も仲間も、あんたには過ぎてんじやねえのか？」

「繰り返すものかと、私は誓った！」

翼は、睨みつけながら剣を天へとかむける。

すると、空から剣が雨のように降り注ぐ。「千ノ落涙」が発動する。

飛び引いて躲す少女に追撃ため切りにかかる。少女は難なく対処し、逆に翼を追い

詰める。

鎧の力をものにしてている事に内心、齒噛みする翼。

「ここであんわり考え事だあ、どしがてえ！」

鞭が振るわれるも回避する翼。少女は、杖から光を放ち新たにノイズを呼び出す。

呼び出された、ノイズが翼に迫る・・・

「っー！」

「なにー！」

迫ることなく、横からきた見ているものを魅入らせるような、

緑色の弾幕と黄色の大きめの弾幕がノイズを一体も残らず倒していく。

時間はさかのぼる事、数分前……

「つう！ 早く翼さんのところに行かないと。」

苦戦する翼の元に行くため、何とかしようとする響。

そこに、黒を基調としたバイク「ライドベンダー：マシンバイクモード」に、乗ってやって来たオーズこと、ルーミア。

「おーz」

響が声をかけようとするのを、人差し指を自身の口に当てるようなしぐさをして止める。

そのあと、「トラクロー」を展開してノイズを切り裂く。

「おっと。ありがとうございます。」

小さな声でお礼を言う響に、頷きで答えるルーミア。

少し離れた場所で戦う、翼とネフシュタインを纏う少女の方を見る。

そこでは少女が使おうとしてた。

「オーズさん、あの杖からノイズが」

「知ってるのだ。」

「……あんまり、手持ち見せたくないけど仕方ないかあ〜」

「つえ？」

響の疑問をよそに、ルーミアは懐からカードを取り出す。

そして、カードを持つ手を少女たちの方に向ける。

「……（スペルカード発動！）」

声には出さずに、スペカの宣言をする。

すると、カード「スペルカード」が光出し、記憶されている攻撃パターンを発動。

「夜符「ミッドナイトバード」」

両腕を広げて、弾幕を放つ。

「うわあ〜！ きれえ〜。」

色鮮やかで、美しさを感じさせるそれは、ノイズへと向かっていく。

ノイズに弾幕が当たると、ノイズは灰になる。

翼と少女は、ノイズが全滅すると同時に、響達の方を見る。

「オーズ！」

「ちようど良い、お前の撃破も頼まれているんだよお！」

「バケモン!!」

その言葉と共に、新たにノイズを呼び出し翼と響にぶつけ、自身はオーズへと向かう。

「待て！ つ〜くっ！」

「ま、待ってください！」

翼と響がノイズに邪魔をされる中、少女はオーズに鞭を絡める。

「身動き取れなきや、バケモンも人間と一緒だなあ！」

「ぐう。」

ルーミアは、引き寄せなれながら真ん中のメダルを器用に変える。

《タカ！カマキリ！バツタ！》

「はあ！」

「はあ〜！ うそ、ネフシユタインの鞭を切りやがった！」

【タカキリバ】の腕で鞭を切り、自由になる。

振り返り、【カマキリソード】で鎧部分を切り刻む。

「ぐあー！」

「待ってください、オーズさん！ 相手は、人間なんですよ。」

響は、ノイズと戦いながら叫ぶ。

ルーミアは響の叫びを無視して、コンボチェンジする。

《タカ！ウナギ！バツタ！》

「ちよせえ！ 鞭には、鞭ってかあ！」

【タカウバ】になったオーズの【ウナギウィップ】と、少女の鞭が舞う。

互角に戦う二人。二人の周りには、ノイズと戦う二人がいる。

「そこなのだ！」

一瞬の隙について、鎧がある部分に攻撃を当てるルーミア。

少女が怯んでいる隙に、ベルトのメダルを黄色系にしスキャンする。

《ライオン！トラ！チーター！》

《ラタ・ラタ・ラトラアターアター！》

「♪:Ride on Right time」

「失明したくなければ、目を瞑ることをお勧めするのだ〜！」

「うおおおー！ー！ー！」

「ぐっ！」

「っな！」

「うわあ！」

猫科の王の力、強烈な光熱放射「ライオディアス」を発動。
ラトラーターコンボ

周りにいる人間の事を考えて放ったため、光も熱も抑えられている。

事前に警告していたため、失明した者はいなかった。

「はああ〜 たあー！」

高速移動しながら、周りにいたノイズたちを倒していく。

「おい待てえ！ お前の相手は」

「私が相手しよう！」

少女の言葉を遮るように、翼が声をかける。

「えくと、」

響がオーズの無双劇に、翼と少女の衝突に動揺しているうちに、状況は変化していく。残っているノイズが一つになるが、オーズは必殺技の体制に入っていた。

《 スキャニングチャージ！ 》

「はああ〜 セイヤアアア〜！」

正面に現れた、黄色のリングを高速移動で駆け抜け、トラクローで×字に切り裂いた。ノイズが爆発したのを感じながら、翼と少女の方を見る。

「つちい！ 分が悪いなあ。」

少女が、肩の鞭状突起からエネルギー球を生成し、響達にぶつける。

「うわあー！」

「つくー！」

「よつと。」

響が吹き飛ばされ、翼が斬撃刃で迎え撃ち、ルーミアがギリギリでよける。

しかし、打ち出さるエネルギー球が多いため煙が上がり、気がついたら少女はいなくなっていた。

「つく！ オーズお前だけでもついて来てもらおうぞ。」

「お断りなのだ〜」

そう呟くとライオディアスを発動させる。

響達が怯んでいるうちに現場を去る（バイクは、きっちり闇の中に回収しました。）
その後すぐに、弦十郎と了子がやって来た。

どこかのストリート・・・

「俺は、一体？」

黒のシャツに、白の革ジャンを着た青年が流れ星を見ながら呟く。

第8話：おとぎ話と出会いと交差する思い

～三人称視点～

「ヒナ、今日もビツキーの事心配してたよ。」

「確か、修行を始めたんでしたっけ？」

「そうそう。一体響は、何を目指してるんだらうね？」

彼女達は響や未来の友達で（セリフの）順番に、

響をビツキー、未来をヒナとニックネームで呼ぶ【安藤あんどう 創世くりよ】

思い出すかのように呟いたのは、【寺島てらしま 詩織しおり】

響の行動に疑問を示したのが、【板場いたば 弓美ゆみ】

彼女達は、ふらわーに向かって歩いていった。

「そうそう、オーズ関連でネットをあさってたらさ、面白いのを見つけたんだ。」

「面白いのですか？」

「うん。・・・闇の人食い妖怪の助け」

「ヒイ！ か、怪談話は す、少し早くないかなあ」

「良いから最後まで聞いてよ！」

・・・・宵闇よいやみの時。

それは、妖怪の活甃かづになる時間。

闇に隠れ、人を喰らう。

しかしこれは妖怪が人を喰らわず、人助けをした物語。

「人助け？」

「そうそう、続き読むね。」

ある日の宵闇の時も、妖怪は人を喰らうため人里離れた場所にいた。

そこに一人の男性が近づくと、妖怪は狩るために身を隠そうとした時、異変に気づく。

男性は妖怪に襲われる前に、ボロボロだったのです。

気まぐれだった妖怪は、男性に訊たずねました。

《どうして、ボロボロなのだ？》

男性は、声をかけられた事に驚きながらも答えました。

《その姿、妖怪か！ いや、もう何でもいい。里が襲われたんだ！》

《誰に襲われたのだ？》

《先の戦で散っていった者の悪霊さ。あんた、妖怪なんだろう。

だったら、里を・・・嫁と子を守ってくれ！》

「妖怪に頼み事したのですか？」

「なんかそれ、まずくね？ てか、オーズ関係ないような？」

「まあまあ、最後まで聞いてよ。」

男性の言葉に、驚いた様子の妖怪。

《お前、僕が妖怪であること忘れてないかあ？》

《分かっている！ 命なら要らない、だから頼む！》

《・・・はあく 分かったのだ。代償は・・・》

《！ ありがとう。》

それから三日後、妖怪が読んで来た「武神・王厨オース」と呼ばれる武人が悪霊を退治し、里には平和が戻っていた。

頼み込んだ男性は、左手を失うも家族と仲良く暮らしました。

「いや、これ・・・オーズ関係なくない?」

「いやいや、これまだましな方だよ。」

他のは、妖怪とオーズの関係が分かりにくいんだよ。」

「そうなのですかね。」

「・・・あれ!」

「どうしたの?」

寺島が指さした場所には、白い革ジャンを着ている青年が倒れていた。

「大丈夫ですか!」

〈響視点〉

私は今、司令・・・師匠の元で修行しています。

何でこうなったかと言いますと、前回の任務で力不足を感じたからです。

それに敵……あの子は、融合症例？である私を狙っているみたいだったから。

融合症例って言うのは、ガングニール^{聖遺物}が体内にある事を指しています。

「響くん！ 今日、ここまでだ。」

明日の「デュランダル」移送計画は、頼んだぞ！」

「はい！」

「では俺は、これからレンタルしたBDを返しに行くから、

響くんも午後は、趣味に使うといい。」

「分かりました、師匠！ 今日もありがとうございました。」

く弦十郎視点く

へ先日の広木防衛大臣、殺人事件についての新しい情報が入ってきました。へ

ビルのモニターから流れる、ニュースを聞いてふと思う。

広木防衛大臣……二課の後ろ盾でもあった人だ。

デュランダル移送任務も彼からの授かった物だ。

考え事と言えば、オーズの事もだ……

以前、俺が彼女に質問した時彼女は、「わはー 何だろうね？」と答えた。

はたから見れば、いたずらに成功した子供のように聞こえたいが、直視していた俺には、まるで人間が踏み入ってはならない闇に思えた。

正直、本気の彼女と戦うとなれば俺は、生きていられるだろうか？

いや、市民や装者それに部下は、命に代えても守ろう！

「誰か、うちの子を!!」

「なにー!」

しまった! 考え事に集中しすぎてようだ。

普段なら助けられる距離だったが、気づくの遅れたために間に合わない!

くそお。このまま、少女が工事現場のパイプに押しつぶされるの見守るしかないのか!

その時だった、俺の横を金髪の少女が駆け抜けていったのは・・・

俺が気づいたと同時に、パイプが落ちきる。

「・・・なん、だと。」

俺以外の人たちも驚いていた。

何故ならさつき俺の横を通っていった少女が、パイプに下にいた少女を助けていたか

らだ。

「はるか!」

「お母さん!」

親子が抱き着いて、いるのを見て助けた少女が立ち去っていく。

「つて、いかん!」

俺は、金髪の少女を追いかけ始めた。

人影がないところに来て追いついた。

「待ってくれ!」

「うん?」

良かった、振り向いてくれた。しかしどうすれば・・・

「これから一緒に、お昼でもどうかな?」

言った後で思ったが、はたから見れば俺が少女を誘拐しようとしているみたいじゃないか!

いかに!

「お兄さん・・・」

少女は、半目で俺を見つめる。・・・お兄さんと呼ばれる年でもない気がするが。

「・・・ここに他の人が居なくてよかったねえ」

慈悲む目で俺を見つめて言う少女。

やはり、さっきの声のかけ方は駄目のようだ。

結局あの後、少女と共にファミレスにやって来た。

正直目の前で、足をプラプラさせながらジュースを飲んでる姿を見れば、

さっきの人外みたいな動きをした子には、見えない。

「お待たせしました、ハンバーグ定食とパンケーキです。」

「では、ごゆっくりどうぞ。」

「それで、何を聞きたいのだ？」

「・・・君は、どうやってあの少女を助けたのか、教えてはくれないだろうか？」

「うくん・・・ 企業秘密ってやつなのさ」

「・・・そうか。」

何故だか、彼女とオーズが重なって見えた。

もしかして・・・いや、まさかな。

「うん？ ここの味は、好みでは無かったか？」

「？」

「いや、君がつまらなそうに真顔で食べていたものだな。」

「・・・僕は、味を感じないから。」

「!? すまない!」

「気にしなくていいのだよ、もうこの感覚にも、反応にも慣れたから。」

「だから、気にしなくていいのだよ」

「・・・分かった。」

「この子、強いな。」

（奏視点）

「そうか翼は、戦うためにイギリスの仕事をまた断ったのか。」

「はい。 奏さんは、」

「よしてくれよ、緒川さん。 世界はあたしには、広すぎる。」

「そんなこと、無いと思えますけど。」

「それに、お盆に墓参りに行けなくなりそうだしな。」

「今でも、ぎりぎりだしな・・・」

「・・・そうですね。」

「それにオーズの言っている事が、本当になら・・・」

「それより、翼は、もう少し気楽にやってもいいと思うんだけどなあ」

〜三人称視点〜

「ほい。 お好み焼き一人前だよ。」

「本当色々ありがとう、おばちゃん！」

「かまわないさ。」

安藤たちは、青年を連れてふらわーにやって来た。

ちなみに店の扉には、「Close」の看板が。

「はい、どうぞ。」

「！」

板場が渡した、お好み焼きを見ると素手でかぶりつく。

「あらあら、随分とワイルドなお方なのですな。」

「いやいや、ワイルドって……」

「お兄さん、名前は？」

「……のぶ、なが。」

「つえ。 のぶながって、織田信長？ そんなわけないか。」

「お兄さん、苗字の方も教えてくれないかな？」

「分からない。 . . . 俺は、どうしてここに？ 俺は. . .」

青年・のぶなが放った言葉に一同、驚きを隠せないでいる。

【記憶喪失】 . . . 思ったより事態は、申告のようですね。」

「この人の持ち物とか何かないのかい。」

「いえ、なにも近くには落ちていませんでしたし、何も持ってたかったです。」

「うーん？ こういう時、アニメではd」

「? . . .」

のぶながについて考えているとき、のぶながは板場のポケットに手を伸ばしていた。

「へえ？ ちよつと！ うん？ハンカチが気になるの？ はい。」

「ハンカチ？」

「そう、モンシロチョウのハンカチ。 可愛いでしょ。良かったら上げるよ。」

もう一枚持っているから。」

「. . . あの二人、仲良すぎない？」

「ありが、とう。」

「板場に、春が訪れたのかしら？」

「ふふ、どういたしまして。これで、お揃いだね。」

「若いつていいねえ。」

「おろそい？」

「よし！あの青年は、おばちゃんに任せな。裏に掃除をすれば、

一人ぐらい住めるスペースがあるから。」

「違うよ。お・そ・ろ・い。」

「あ、掃除手伝います。」

「おそろい。お揃い、のハンカチ。」

「私も、お手伝いします。」

「そうそう。お揃いのハンカチだよ！」

「それなら、お言葉に甘えようかしら。」

第9話：移送計画と爬虫類のヤミーと海のコンボ

（三人称視点）

「防衛大臣殺害犯を検挙する名目で検問を配備！

記憶の遺跡まで一気に駆け抜ける！」

朝の5時頃、二課によるデュランダル移送計画が始まろうとしていた。

永田町地下の特別電算室、通称「記憶の遺跡」

地下1800メートルにある場所に、完全聖遺物のデュランダル運ぶ事になってい
る。

その任務に響達、シンフォギア装者も同行することに。

「翼と奏は、俺と一緒にヘリで、」

「響ちゃんは、私の車に。」

「はい！」

「それじゃあ、名付けて『天下の往来独り占め作戦』、開始。」

了子の言葉を聞き、それぞれが自分の持ち場に着く。

場所は変わり、どこか薄暗い場所。

そこに銀髪の少女が居た。

「今度こそ成功させる。」

バケモン倒して、力のあるやつ倒して、世界から戦争をなくすためにも！」

自信の目標を、口にした少女。

そこに、オレンジ色のシャツを着た男性がやって来る。

「あんた、なにもんだ！」

「その欲望、解放してやる。」

少女の問いに答えず、他に持っていたコブラの絵が描かれた、銀色のメダルを少女に投げる。

すると、少女の額にメダルが入るスペース・コイン投入口が現れる。

そこにメダルが入り、少女から全身に包帯を巻いた怪物が現れる。

「なっ！」

少女が驚きの声を上げると、包帯が弾け人間の顔を持つトカゲのような怪人になる。

「ん」

「慌てんな！ こいつは、【ヤミー】。」

「簡単に言うと、お前の望みをかなえるお前の力だ。」

「私の力・・・」

「ああ、そうだ。」

「こいつで、オーズの嬢ちゃん・・・バケモンをつぶせばいい。」

「バケモンには、バケモンってか。」

「・・・なんで私にこいつを？」

「俺も、オーズの嬢ちゃんには色々あるからな。」

まあ、利害の一致ってやつだ。」

「オーズを潰し、争いを潰す！」

怪物・【ウミイグアナヤミー】が、太陽を背に呟く。

「朝ご飯、出来た。」

「ニャー！」

「ソラは、こつちですよ。」

朝食の調理が終わったため、机に運びながら出来たことを伝えるニル。

自分にも！　と言う猫・ソラにキャットフードを小皿に盛り付けているセレナ。

それを、まるで子供を見守る親の目で見ているルーミア。

・・・椅子に座って、床につかない足をぶらぶらさせているが。

人間、猫、そして妖怪のいつもと変わらぬ日常がそこには、あった。

「ニャー」

「ふふ、私達も食べましょうか。」

「「いただきます！」」

「そう言えば、ルーミアさん。昨日、女の子を助けたんでしたよね？」

「・・・どうして助けたの？」

「うん？　母親の【助けて】って欲望を聞いたから。」

「欲望って・・・」

「マスター、らしい。」

「ニャー？」

「やっぱり、妖怪らしくないかあ」

「でも、誰かの声にこたえて、手を伸ばすのは、ルーミアさんらしいです！」

「・・・セレナ。」

「マスターの人助けて、私達、ここに居る。」

「・・・ニル。」

「うん。暗いのは、僕らしくないよね！」

「！」ギャーン！

「・・・ノイズですか？」

「違う、ヤミーなのだ。」

「マスター！」

少し前、デュランダルを入れた箱を後部座席にのせて走る、

ピンク色の了子の車。そして、周りを囲む4台の護衛の車が橋に近づいていた。

「了子さん！」

助手席に乗る響が、了子に異変を知らせる。現に端にひびが入っていた。

橋の一部が崩壊し、護衛の車が一台海に落ちる。

「ああ！」

「しつかり捕まってるね。私のドライブテクニックは凶暴よ。」

「敵襲だ！ まだ確認出来ないがノイズだろう！」

響が悲痛な声を上げる中、了子と弦十郎はすぐさま動き出す。

「この展開、想定していたより早いかも。」

次の瞬間、誰もが予想できなかった出来事が起きる。

後ろを走る護衛の車が通過する前に、マンホールの蓋が開きふきあがった水に吹き飛ばされる。

それと同時に、海から水柱が上がり中から現れた影が、光弾を放つ。

「黒トカゲの怪人だ！」

「ぶ、ぶつかろう！」

光弾は当たりこそしなかったが、前を走る護衛車が衝撃で吹き飛び、響達が乗る車にぶつかりそうになるのを、了子が華麗に回避する。

後ろで車が爆発したの確認し、通信を入れる。

「弦十郎くん。ちよつとやばいんじゃない？」

この先の薬品工場で爆発でも起きたらデュランダルは……

へ分かっている。さつきから護衛車を的確に狙い撃ちしてくるのは、デュランダルを破損させないように制御されているように見える！」

「ツチ！」

了子がした舌打ちは、ウミイグアナヤミーが残った護衛者に放った、

光弾の着弾音によって、誰にも聞かれる事が無かった。

〈狙いがデュランダルなら、敢えて危険な地域に滑り込み、

攻め手を封じるって寸法だ！〉

「勝算は？」

「翼さん！ 奏さん！」

弦十郎の提案に、了子が質問する。

その時空から、翼と奏がシンフォギアを纏い降りて来たのを響が見つける。

〈思いつきを数字で語れるものかよ!!〉

弦十郎の言葉と共に、マンホールが開き今度は、ノイズが現れる。

それを躲すように、薬品工場の方に曲がる。

「♪：絶刀・天羽々斬」

「早く、逃げろ！」

「この人たちにこれ以上、手は出させない。」

奏と翼は、護衛車に乗っていたSPの人たちを守りながらノイズと戦っていた。そこに、ウミイグアナヤミーが近づく。

「潰す！」

「防人としてお前にこれ以上、好き勝手にはさせない！」

翼がアームドギアで切りにかかる。

「なに！」

「嘘だろ！」

しかし、刃がヤミーの皮膚に当たった瞬間ビクともしなくなる。

翼が動揺している隙に、体を回転し長い尻尾を翼に当てる。

「ぐあー！」

「翼！ つしまて」

翼が吹き飛ばされた所を見ると、背中のクレスト（刺状の鱗）を光らせ、

口元にエネルギーをためていた。奏が気づいたと同時に青白い熱戦として放たれる。

「があー！」

「奏！」

奏も翼のところに飛ばされる。

ダメージが思ったよりあるのか、思い道理に動けない二人に追撃の光弾を放つヤミー

「つくー！」

「つうー！」

思わず目を瞑る二人。その直後爆発音が響く。

〈奏君！ 翼！〉

通信機から弦十郎の声が聞こえる。

二人が、目を恐る恐る開けると・・・

「オーズ。」

「それに、ニル！」

「オーズウ！！」

「うるさい。」

「なんか、小っちゃい怪獣王みたいなヤミーだな〜」

オーズとポセイドンに変身した、二人がいた。

ヤミーの遠吠えにより、近くにいたノイズが集まってくる。

「マスター。ノイズは、私が。」

「うん。分かったのだ〜」

「潰す、オーズ！」

「翼、私達も行くぞ！」

「うん！」

「♪：変身・オーズ」

ニル達が、ノイズの相手をしているの横目に、ヤミーに右ストレートをやる。

「硬い！」

しかし、あまりの強度にびっくりする。

驚いている隙に尻尾で攻撃しようとするヤミー。それを後ろに跳ぶことで回避する。

「これなら、どうなのだ！」

《タカ！ゴリラ！バッター！》

今のままでは、不利だと感じ「タカゴリバ」へと、コンボチェンジする。

【バツタレッグ】跳躍で跳び、力任せにパンチする。

「つぐお！」

「らあ！」

数メートルほど後ずさるだけだったものの、追撃で「バゴーンプレッシャー」を放つ。

「！ うわあ！」

しかし、熱戦で攻撃は弾かれ、熱戦がオーズを吹き飛ばす。

「ううくん。 怪獣王もどき強い！」

オーズに対して追撃の熱戦を放とうとする、ウミイグアナヤミー。それを見たオーズは、三枚の青いコアメダルをスキャンする。

キン！キン！キン！ ズツキューン！

《 シャチ！ウナギ！タコ！ 》

スキャンし終わると、同時に熱戦が放たれ爆発を起こす。

「おいおい、マジかよ・・・」

「オーズでも、敵わぬと言うのか！」

「・・・マスター。」

「ギヤオオオオーン!!」

ヤミーが勝利の雄叫びを上げる。 叫び終わり、ニル達の方を見る。

その時だった。 ヤミーの背中の方から、ヤミーに向かうように土が盛り上がる。音に気が付いたヤミーが振り返ると・・・

「♪：Shout out」

「はあ！」

《 シャ・シャ・シャウター！シャ・シャ・シャウター!! 》

ヤミーの足元の土が吹き飛び、ヤミーごと中に舞う！

その中心には、この現象を起こした、水棲生物の王のオーズが！

「はああ〜・・・はあ！」

地面へと着地したオーズは、ゆっくりと息を吐き気合を入れ直す。

「オーズウ〜〜!!」

ヤミーは、オーズに怒りの念を込め、熱戦を放つ。

それに対してオーズは、頭部の「シヤチヘッド」から水流を放つ。

両者の攻撃は、ぶつかり合い小さな爆発を起こす。

「はあああー」

そのまま互いに近づき接近戦になる。

ヤミーは力任せに攻撃をして、オーズは受け流しながら隙を見つけて反撃をする。

しばらく似たような攻防が続く。オーズが軽くヤミーを押し。

立ち直ったヤミーは、空いた距離を利用して尻尾で攻撃しようとする。

オーズは躲してから尻尾をつかみ、

元あつた力を利用するようにヤミーとは、反対の方向に回転をする。

「はあー」

ジャイアントスイングの要領で振り回し、空へと投げ飛ばす。

すぐさま、「タコレッグ」を展開し足を8本に。勢いをつけ空中に跳ぶ。(飛ぶ?)

気づいたヤミーが、光弾を放つも、「ボルトームウィップ」で弾き飛ばしヤミーに当てる。

その時、セルメダルが落ちていき闇の中へと消えていく。

「逃がさないのだ〜」

ヤミーはオーズの荒業に驚き、恐怖して水中海に逃げる。

オーズは「液化化」し、ヤミーを追いかける。

「うららららら〜」

オーズもヤミーも、水を得た魚のように動き、戦いは激しくなる。

オーズの8本の足によるラツシユで空中に打ち上げられるヤミー。

《 スキャニングチャージ！ 》

「セイヤアアア〜！」

敵を拘束し、そのまま引き寄せ、8本の足をドリルのように回転させ、

相手をつなぐ、必殺のドリルキック「オクトバニツシユ」が炸裂！ ヤミーを撃破す

る。

《 シャチ！ウナギ！コンドル！ 》

セルメダルを回収して、「シャウドル」となりノイズ退治に向かう。

第10話：不滅の刃と暴走と吸収コンボ

～三人称視点～

ノイズは、デュランダルをのせた了子の車に対して、ちゆうちよするかのように動いているように見える。

「狙い通りです！」

予想が的中したことに喜ぶ響。

しかし突然、何かを踏んだのか車が横転する。

「うわあああ！」

そのまま車は、回転しながら転げていく。

〈南無三！〉

身を出しながら、弦十郎がへりから叫ぶ。

何とか、上下が逆さまになった状態で車が止まる。

どうやら、響達も無事のようにだ。

しかし、すでに大量のノイズが響達の前にいた。さらに翠の光と共に、ノイズが追加される。

「っあ・・・」

響は、すぐさまデュランダルが入った箱を取り出す。

「了子さん。これ、重い……」

持ったものの、重くて走れそうにない。

それを、ネフシユタンの鎧の少女が見下ろしていた。

「だったら。いつそこここに置いて私たちは逃げましょ。」

「そんなのダメです！」

了子の提案を、振り返りながら否定する響。

「そりゃあ、そうよね……」

了子が苦笑いしながら、呟く。

何処か余裕そうな態度なのは、響を不和にさせないためか、もしくは……
少なくとも、響は必死で了子の態度には、気が付かないようだ。

ノイズは、そんな響達にの攻撃をする。何とか躲すものの車が爆発する。

「わあー！」

「つち。何も見えん。」

響はデュランダルを抱えていたためか、近くに飛ばされる。

一方、上空のヘリからは、爆発の煙で何も見えない状態に。

そんなことは、関係ないとノイズは姿を変え、響に突撃する。

そこに了子が、響を庇うように前に出て片手を突き出す。

すると紫色の半透明な障壁が了子の前に現れ、弾丸のように来たノイズを弾く。その余波で、メガネが飛び、髪 of 解け風に靡いた。

「……了子、さん？」

身体を起こした響が啞然と眩く。

「しようがないわね。あなたのやりたいことをやりたいようにやりなさい！」

「私、歌います。」

了子の問いに、響は立ち上がり答える。

目を瞑り、詠唱を歌う。

「Ball^{バル}wis^{ワイ}sy^{シャ}all^ル Ne^ネsce^スll^{ケル} ga^ガnn^グni^ニr^{ール} t^トron^{ローン}」

「♪：撃槍・ガングニール」

響は、両手を構える。迫りくるノイズを最小限の動きで回避し

……こける。

(ヒールが邪魔だ。)

すぐに立ち上がり、ヒールを破壊する事で、いつもの靴と同じにする。ノイズがどこから来てもいいように、辺りを見ながら構える。

すると、目の前からノイズが迫る。響は、発勁で反撃。

次々攻撃してくるノイズに、カウンターや最小限の動きで回避していく。

その動きは、以前の戦いを知らない人とは、別人のようだった。

「こいつ・・・戦えるようになってるのか？」

あまりの変わりように、ネフシユタン纏う少女が眩く。

「つあ・・・この反応、まさか！」

了子が振り向いた先にはアタツシユケースが赤く点滅し、開いたように煙が吹き出していた。

その頃、彼女達のところに戦いながら、向かう四人の影があった。

「・・・と言う訳で、デユランダルを運んでるだ。」

「ちよつと、奏！」

「・・・いいの？ 伝えて。」

「あんたらは、個人的に信用できるかな。」

「・・・それに、今は人手が欲しい！」

「なるほどね〜 つと！」

《クワガタ！カマキリ！カンガルー！》

【シャキリガル】から、【ガタキリガル】に変わると、頭の角から雷撃を放つオーズ。

それに続きニルがエネルギー波を、奏が【STAR DUST∞FOTON】を、翼が【千ノ落涙】を放つ。

《トリプル・スキャニングチャージ！》

【オーズバツシュ】で、残ったノイズを空間ごと切り裂く。

「・・・行こう！」

奏の言葉に頷き、響達のところに向かう。

その頃、響はネフシユタン纏う少女と交戦していた。

・・・と言っても響は、攻撃を躲しているだけだが。

そんな中、アタツシユケースからデュランダルが飛び出し、光輝きながら空中に停止する。

「覚醒、起動?!」

了子は驚き見上げる。

響達もデュランダルの方を見る。

そんな中、ネフシユタン纏う少女が動き出す。

「こいつが、デユランダール！」

「たあー！」

「渡すものかあぁー！」

少女が、デユランダールに手を伸ばそうとしたところを、

響がぶつかると同時に、その勢いのまま鞘を掴む。

それと同時に、奏達が到着する。

「どうなってるだこれ？」

「あれが、デユランダールなのか。」

「……！ それを放せ！」

ニルの警告がすると同時に、デユランダールが音を発する。

「「!?」」

「……まじいなぁ〜」

人間が一瞬寒気を感じる中、ルーミアが呟く。

デユランダールから放たれる光が、見る間に増す。

響が、デユランダールを持ったまま地に降り立った。

「う、うううう!!」

低く獣ようなうなり声を上げる。何かを押さえこむように歯を食いしばる響。そんな響とデュランダルか光が溢れ出す。

その光景は、響が初めてシンフォギアを纏った時のようだった。

この場の全員が、驚愕の眼差しで見ると、デュランダルを天に掲げる。

すると、欠けていた切っ先が再生し、石化したような灰色から黄金に変わる。

「うううあああー!!」

再び低く獣のような唸り声を上げる。

理性の飛んだ淀んだどす黒い感情の渦巻く視線で、響はただ虚空を見る。

「・・・暴走!」

「止めるよ、ニル!」

「分かった。」

「こいつ。何を、しやがった・・・」

響の異常に、眩くニル。いつもとは違う音色で、指示を出したオーズ。

困惑しながら、眩く少女。了子は、響を恍惚とした表情で見ている。

「つく! そんな力を見せびらかすなああ!」

叫びながら杖から光を・・・ノイズを出す。

「うううう!」

「っー！」

それに反応した響が、ノイズの方を、その先の少女を見る。
言いようのない圧に、怯む少女。

「ああああー！」

雄叫びを上げ、デュランダルを・・・

「させない。」

振り下ろす前に、瞬間移動のごとく近づいて来たニルに羽交い絞めにされる。

「大丈夫か〜？」

「ど、どうして？」

いつもの音色で、無事かどうかを確認するオーズ。

そんなオーズに・・・オーズ達に疑問をぶつける。

「どうして？ そうだなく・・・」

「・・・君たちが泣いているから。じゃあ、ダメか〜？」

「泣いているから・・・」

少女の疑問に、メダルを変えながら答える。

「私は、泣いてねえぞ！」

「少なくとも響って子は、泣いている。」

・・・助けてつて願欲望いを叫んでいる。それで、十分なのだ。」

響の方に振り向き、薄紫のメダルを3枚スキャンする。

《サーベルタイガー！メガネウラ！アンモナイト！》

《サーメイト！ サアー！ メ！ イト！》

【サーメイトコンボ】に変わる。

「それに、変身している時。僕は、妖怪じゃなくて【仮面ライダー】だから！」

「仮面、ライダー？」

顔だけを少女に向け、言葉を紡ぐ。

・・・たとえ、意味が通じなくても。

すぐさま正面（響の方）を向き、「メガネウラアーム」の背中にある羽を展開し空に跳ぶ。

目指すは、響の上にある光の柱・・・デュランダルから出たエネルギーの元へ。

一見、攻撃に使うエネルギーに近づくのは、自殺行為だろう。

「オーズは、何をやる気だ！」

「了子さん、あの光の柱は、なんだ？」

「アレは、デュランダルから生み出された、フォニックゲインなんじゃないかしら？」

了子の言葉を聞き奏と翼は、オーズの方を見る。

「♪：妖魔夜行 激戦アレンジ」

オーズは光の柱の中に入ると、

サーメイトコンボのコンボ能力「エネルギーの吸収」を発動させる。

すると、柱は消える。それと同時に響が、ニルを振りほどく。

「ぐがああ！」

「・・・」

響がやみくもに剣を振るうも、ニルはノイズを盾にしながら回避する。

そこに、オーズが降りてくる。

「・・・マスター、任せてもいい？」

「うん。大丈夫なのだ〜！」

ニルは残りのノイズの撃破に向かい、オーズが響と向き合う。

しばらく睨みつけ合い、響がデユランダルから斬撃波を放つ。

それと同時に、「オーラングサークル」のサーベルタイガーが輝き、

【ラインドライブ】通り、頭部にエネルギーを送る。

「はあ！」

【タイガーヘッド】にある二本の牙で、斬撃波をかみ砕く。

「ううう！」

その様子に、一瞬怯むも突撃する。

16文キック（いわゆるやk・・・ケンカキック）で攻撃する。

オーズは、まるでアンモナイトの殻が付いている右足で防ぐ。

そのまま、右足を伸ばして蹴りを入れる。

右足が地に着くと同時に、「アンモナイトレグ」にエネルギーが込められる。

「それは、没収なのだ」

言葉と共に、左足を出す。すると触手のような物が響に向かって伸びる。

触手は、響が持つデュランダルを絡めとる。

「あ」

デュランダルが手から離れると、響は気絶するように倒れる。

完全に倒れる前に、足を元に戻したオーズが抱き留める。

そのまま、響を抱える。（お姫様抱っこで）

「オーズ！」

「この子、お願いね。」

「任せる・・・響をありがとなあ。」

奏のお礼の言葉に頷いて答えたオーズ。

「あの子は、逃げたのか」

辺りを見わわして、ネフシユタン纏う少女が居なくなっている事を確認すると、ノイズの方に向かう。(デュランダルは、翼が回収しました。)

「・・・終わり。」

【ストライクフアング】(ライダーキック)を決めて最後のノイズを撃破する。

「ありや？ オワっちゃった。」

「帰ろ、マスター。」

「分かったのだ。」

第11話：疲労と相談と防御のコンボ

～ 三人称視点 ～

「ルーミアさんとニルさん、大丈夫でしょうか？」

セレナが二人の心配をしている時、闇が溢れ出すように現れた。

その闇が弾けるように晴れると、ルーミア達が出てくる。

「・・・ただいま。」

「お帰りなさい。」

二人があいさつをしている中、急にルーミアが倒れだす。

「マスター！」

「ルーミアさん！」

「流石に、無茶だったかあ・・・」

ルーミアは、先ほどの戦闘でデユランダルのエネルギーを吸収した。

そのエネルギーが、ルーミアの許容範囲を軽く超えた状態で戦っていた。

戦いが終わり、帰り着いたため緊張が解け倒れてしまったのだろう。

くルーミア視点く

目覚めたのは、三日後だった。

「う、うくん？ セレナ？」

えくと。僕がベットで寝てて、セレナがそのそばで椅子に座って寝てる。

・・・あ！これ、看病しててくれたのか。

「・・・僕、妖怪でグリードなんだけどなく」

「それに、人食い妖怪の前で無防備に寝るって、

『食べてください』って言うもんなのだ。」

・・・寝てるセレナに言っても仕方ないか。

それだけ信用せれているって事か

「それも、問題なんだけどなく」

そう思いながらも、セレナを優しく撫でてる僕もいる。

食欲無いけど、なんか食べてかな？

僕は、完全なグリードじゃないから、食べないと死ぬんだよね

ほんと、グリードってめんどいな

と言う訳でやって来たのは、何時ぞやのお好み焼き屋『ふらわー』

来た理由？ 神が言ってる気がしたからなのだ。メイちゃんとリアさんは、関係ない。

つえ？ そいつらは、誰だつて？ ルーミアとしての初めての友達かな？ *一話参照

それじゃ、レッツゴー！（店に入るだけだけどね。）

「お腹空いてるんです。」

今日はおばちゃんのお好み焼き食べたくて、朝から何も食べてないから・・・」

「「「・・・」」」

「「・・・いらつしやい。」

店に入ると、暗い顔した高校生ぐらいの白いリボンの子が、

店長のおばちゃんに相談？ してたのだ。

おばちゃんの声を聞いて、女の子の近くに行く。

「となり、いいか？」

「つえ！ 良いけど、今すいてるよ。」

「僕は、ここの気分だなくって。」

そう言いながら、女の子の近くに座る。

「なんか、適当に頂戴！」

「あいよ！」

「・・・君、なんて言うのかな？」

「ルーミアなのだよ。君は？」

「私は、未来。小日向 未来。」

「それで、未来ちゃんはどうして、暗い顔をしてるのだ？」

「つえ！ し、してる？」

「うん。何でも言つてよ。僕、年上だしさ〜」

「嘘！」

「こんななりでも、バイクの免許待っているからね。」

「ごめんなさい。小学生かとばかり。」

「気にしてないのだ〜 身長140センチぐらいだしねえ〜」

☆少女相談中★

「なるほどね〜」

「・・・うん。」

「君は、その子にどうして欲しいのさ？」

「・・・隠してる事を話して欲しい。」

「でも、友達は嘘をついて隠してる。」

「・・・」

「嘘つて悪い事なのかな？」

「え？」

「ある医者の話なんだけど・・・」

「あるウイルスに感染した医者がいたの。」

その医者の友達の監察医がそのウイルスについて調べたんだ。

そのウイルスの事を医者に説明するんだけど・・・その医者は、死んじやったの。」

「どうして？ 症状とか分かったんでしょ？」

「そのウイルスが、新種のウイルスだったから。それを知って医者は、自殺したんだ。」

それ以来監察院は、嘘をつくようになったのだ。」

「・・・真実を伝えて、友達が死んじやったから。」

「そんな！」

「クツス！ わはー 乗せられちゃった〜！」

「え？」

「これ前世見た、仮面むかしライダーの内容なのだ〜」

「嘘が誰かを守る事もあるって知っててほしかったんだ〜」

「嘘が、誰かを守る。」

「その響って子も、そうなんじゃないのか。って思うんだよね〜」

「……！ 響。」

……それから時間が経って。

僕は、り……何とか学校の生徒寮？ 寄宿舎？に向かっている。

ま、簡単に言えば未来ちゃんを送っている。

「相談に乗ってくれたり、お金出してもらったり、送っていただいてありがとうございます。」

「気にするなく 何となくだからね〜」

本当に何となく、嫌な予感がしたから送っている。それだけだからなく

「あ！響〜！」

「未来！」

あ、響ちゃんって響ちゃんだったのか〜（同じ名前の子だと思ってた。）

「っ！来ちゃダメだ！ここは・・・」

響ちゃんが警告が最後まで続く事は、無かった。

何故なら、僕達と響ちゃんのあいだに鞭が飛んできた？のだけ

「キヤアア〜！」

「おっと。」

「しまった！あいつの他にもいたのか!？」

衝撃で吹き飛ばす未来ちゃんを空中でキャッチする。

その直後、ネフシユタンの少女が驚いた声が聞こえた。

「Ball w i s s y a l l N e s c e l l g u n g n i r t r o n」
パ
ル
ウ
イ
シ
ヤ
ル
ネ
ス
ケ
ル
ガ
ン
グ
ニ
ー
ル
ト
ロ
ー
ン

響ちゃんが詠唱を歌うと、シンフォニーギア？を纏い離れていく。

ネフシユタンの少女が、何かを呟いて追いかけていった。

「ル、ルーミアさん、と、飛んでる!？」

「あゝ、説明めんどくさいからパスでよろしくなのだ〜」

「はい。・・・え！」

未来ちゃんを地面に降ろす。 あ、ライドベンダー見つけ。

「あゝの・・・のど、沸いたんですか？」

「うん？ 違うよ。」

そう答えながら、セルメダルをライドベンダーに入れる。

《タカ缶！ プテラ缶！》

「タカちゃんは、ニルを呼んできて欲しいのさ！ テラテラは、未来ちゃんをお願いね！」

カンドロイドをプルタブを開ける。起動したタカちゃんとテラテラは頷いてくれた。それを見て、セルメダルをもう一枚入れバイク状態にするためのボタンを押す。

このままだと運転できないから（身長的に大型の運転わね）、ベルトを腰に装着する。闇懐の中から三枚のコアメダルを取り出す。セットしてスキャン。

キン！キン！キン！ ズツキーン！

「変身！」

「っえ！」

《タカ！トラ！バツタ！》

《ターターバ！タ・ト・バ タ・ト・バ！》

歌のように聞こえる振動が鳴る？と僕の肉体は、

スキャンしたメダルの動物の力が宿る姿に変わる。

「じゃあ。未来ちゃんは、テラテラ・・・紫の鳥についていつて逃げて。」

そう言いながら、バイクにまたがる。

「あ、あの！ ルーミアさんですよね？」

「うん。君の友達は、任せてほしいのだ」

「・・・響を、お願いします。」

頷いて、バイクを出す。

～三人称視点～

少し離れた場所にある森の中。そこで、響達は戦っていた。

少女が鞭を振り上げる、響は腕をクロスさせることで防ぐ。

「どんくせえのが、やってくれる！」

「どんくさいなんて名前じゃない！」

符的な笑みを浮かべて言う少女がの言葉を、腕を振りながら否定する響。

「私は立花響、15才！ 誕生日は九月の十三日で、血液型はO型！」

身長は、こないだの測定では157cm！ 体重は・・・もう少し仲良くなったら教えてあげる！

趣味は人助けで、好きなものは、ごはん&ごはん！」

「あと・・・彼氏いない歴は年齢と同じ！」

急に自己紹介を始める響。

「何をトチ狂ってやがるんだ、お前。」

「ご尤もである。」

「何で、自己紹介？」

そこに、オーズもやって来てバイクを降りながら質問をぶつける。

「お前は！」

「オーズさん！いや・・・」

「私たちはノイズと違って言葉が通じるから、ちゃんと話し合いたいと思ひまして。」

「そくなのか。」

「揃いも揃って、なんて悠長！この期に及んツで！」

そう言って、鞭を振るう少女。

響は確実に躲けていき、オーズは「トラクロー」で切っていく。

（つく！やつぱ、仮面ライダーは強い！ それに・・・）

少女は、的確に連続攻撃をかわす響を見る。

(こいつ、何が変わった？・・・覚悟か！)

響の変わりように、内心驚く。そして響は、再び言葉を投げかける。

「話し合おうよ！ 私たちは戦っちゃいけないんだ！

だって、言葉が通じていれば人間は！」

「うるせえ！ わかり合えるものかよ人間が！ そんな風に出てくるものか！」

その言葉を遮って、少女が叫ぶ。

「・・・確かに、幻想かもね。」

「っー！」

「っおー！」

少女の言葉に、共感するように呟くオーズ・・・いや、ルーミア。

驚いたようにオーズを見る響。少女は、攻撃の手をやめオーズを見る。

「確かに、分かり合うのって難しい。 全ての人が自分の考えに賛同してくれるわけないし。」

ちよつと、他人と違うだけですぐにいじめになる。」

「そ、それは・・・」

ルーミアが呟く言葉に思うところがあるのか、俯く響。

「・・・けどね、案外しようもなかったりするんだ。

小学生の時に自分をいじめてた相手も、高校生の時に会ったら馬が合ったりするんだよね。」

「オーズさん。」

「何が、言いたいだよお！」

響が顔を上げ、少女が叫ぶ。メダルを変えながら、ルーミアは言う。

「そうだな～・・・分かり合える時は分かり合えるし、

分かり合えない時はとことん分かり合えない。それが人間じゃないかな～　って事。」

「ふざけるなあー！ー！」

少女が叫びながら、鞭を振るう。

「オーズさん！」

「・・・やったか？」

土煙の中を見る、響達。土煙が晴れるとそこには、

シク教徒やイスラム教の方々が頭に巻いているターバンのように巻かれているコブラの頭、

甲羅模様のシールドアーマーや盾状の装甲、太ももまである装甲。

《 コブラ！カメ！ワニ！ 》

「ふざけて、言っているわけじゃないのだ。」

別の世界だと、江戸の時を生きた偉人から渡されたメダルで変身した姿。

不老不死と関係があるとされる力「ソーマ・ヴェノム」によって、

傷・ダメージを一瞬で回復して再生する姿。

《 ブラカ〜ワニ!! 》

「ただ、僕が個人的に思う人間って言う種族を語っただけなのだ〜」
ブラカワニ コンボ
 爬虫類の王となったオーズが、立っていた。

「♪：ブラカワニ コンボ」

「ああ、もう！ ちよせえ！」

「オーズさん！」

少女がオーズに鞭を振るう。 オーズは、棒立ちで受ける。

「お前に、何が分かる！ 人間じゃないバク、妖怪のお前がぁー！」

「どうして、避けたり、防いだりしないんですか！」

「そんなに攻撃されたいんだったら、こいつをやるよ！」

少女は跳び、鞭にエネルギーを溜める。

白と黒が球体状のエネルギーをオーズに向けて、放つ！

両腕の「ゴウラガードナー」を合わせて、「ゴーラシルデュオ」と言うシールドで防ぐ。

「もってけ、ダブルだ！」

「つぐうううう・・・」

さらに、もう一つ作り出しオーズに放つ。少しづつ後ろに押されていくオーズ。

そんなオーズの背中を支える手がそつと置かれる。

「お前・・・」

「オーズさんが、何者かなんて関係ありません！」

「・・・それにお礼。まだ、言えてませんから!!」

「・・・そつか〜」

「はいー！」

二人が力を込める。その後爆発が起きる。

「はあ、はあ。お前らなんかがいるから、あたしはまだ・・・つな!」

土煙が晴れると、無傷で立つオーズと響の姿!

少女が驚いている隙に、両手に光のエネルギーを溜めていた。

「はああああ・・・うわ!」

何かが形成されようとしていたが、暴発し響は弾かれるように吹き飛ばす。

すぐに立ち上がり、思考する。

(これじゃダメだ。奏さんや翼さんのようにギアのエネルギーを固定できない！)

「この短期間にアームドギアまで手にしようっていうのか!？」

響が何をしようとしたのか理解した少女が驚きの声を上げる。

(エネルギーがまだアームドギアで形成されないのなら、

その分のエネルギーをぶつけなければいいだけ！)

「させるかよ!」

響が今度は、右手に溜める。すると、手首にあるギミックが動き出す。

それを見た少女が鞭を振り攻撃をする。

(! 間に合わない!)

「セイヤア!」

響に当たりそうになった、その時!

横から現れたオーズが「ソウテッドサイザー」で強化した蹴りで鞭を弾く。

「行け!」

「はい!」

オーズの横を通り抜け、少女に向けて駆ける。

それに対して少女は、迎え撃つため鞭を振ろうとする。

同時にオーズは、闇の中から笛「ブランキングー」を取り出し、吹き始める。

響への攻撃は、オーズの頭部に巻かれているコブラが弾いていく。

響は、少女の鎧に向けて渾身の一撃を叩きこむ！ 殴られた部分には、ヒビが入っている。

それを受けた少女は、後ろに吹き飛ぶ。

「ぐう！・・・があ！」

（バカな、ネフシユタンの鎧が?!）

（・・・なんて無理筋な使い方をしやがる。この力、あの女の絶唱に匹敵しかねない！）

一瞬意識が飛びそうになる少女。

それもそのはず、パイルバンカー形式で放たれた拳の一撃。

それは装甲が分厚い敵を貫徹し、有効なダメージを与える

実上の拳とエネルギーによる二弾攻撃なのだから。

少女は、体に凄まじい痛みを感じる。ネフシユタンの鎧が少女の肉体ごと再生しているからだ。

（食い破られるまでに片を付けなければ・・・）

そう思いながら、前を見る少女。そこには、戦闘態勢を解いた二人が！

「お前ら、バカにしてんのか！ あたしを……」

戦う気のない二人を見て、怒る少女。……いや、

「雪音 クリスを！」

「そっか、クリスちゃんって言うんだ。」

「ねえ、クリスちゃん。こんな戦いもう止めようよ。」

ノイズと違って、私たちは言葉を交わすことが出来る。

ちやんと話をすればきつと分かり合えるはず！ だって私たち、同じ人間だよ！」

紡がれた言葉は、響の本心。

しかしその言葉は、クリスの怒りを掻き立てるには、十分だった。

「……お前くせえんだよ。 ウソくせえ！ 青臭え！」

「吹っ飛べよ！ 装甲分解だ！」

「！」

クリスはネフシユタンの鎧をパージし、弾丸のように響達向かって飛ぶ。

いち早く気づいたオーズは、響の前に立ち両腕を合わせゴーラシルデュオを展開し防ぐ。

更にオーズは、霊力と闇を合わせた結界を周囲に張る。 そんな中響は、歌を聞いた。

「Killiter Ichai val tron」

「この歌って?..」

その歌は、シンフォギアを起動させる詠唱。

土煙の中から、シンフォギアを纏ったクリスの姿が！

「見せてやる、イチイバルの力だ！」

第12話：バトルルマニアと仲間と再開

〜三人称視点〜

「この歌って?」

「クリスちゃん・・・私たちと同じ!」

クリスの纏う、鎧・シンフォギアを見て響が言葉をこぼす。

「・・・歌わせたな!」

「え?」

「あたしに歌を歌わせたな!」

クリスが呟く言葉に、困惑する響。

「教えてやる。・・・あたしは歌が大っ嫌いだ!!」

「・・・歌が嫌い?」

睨みつけながらクリスが言う。

響が反応している間に、右手にボウガンを構える。

そして歌い始め、ボウガンから光の矢を放つ。

「うわわ!」

「つぐー！」

響は慌ててよけ、オーズは「ゴースルデューオ」で防ぐ。

「グアアー！」

「！ オーズさん！」

攻撃を防いでいたオーズの横腹に、第三者の攻撃が当たる。

気づいた響は、慌ててオーズに近づく。

「大丈夫ですか！」

「大丈夫なのだ。」

「随分と、久しぶりだな〜」

オーズが森の中を見る。そこには爬虫類を思わせるオレンジ系色の怪人がたたずんでいた。

「何ですか、アレ？」

「!? お前は!!」

「挨拶ぐらいしたらどうだ〜? . . . ゲール。」

ゲールと呼ばれた怪人。「グリード」は、明かりが照らすところまで歩いてくる。

「必要ねえな！ 俺はお前と戦い、コアメダルを貰う！」

「相変わらず、バトルマニアだな〜」

「相変わらずなのは、お前だろ！ オーズの嬢ちゃん。」

「そうかあ〜？」

「オーズさん、知り合い何ですか？」

「まあね。」

「・・・と言うか、どうしてその姿なのだ？ メダルは、全部そろってないだろ〜？」

「どうでも、いいだろ。 それより、戦おうぜ！」

「はあ〜・・・ あんまり、つかれる事したくないんでけどな〜！」

その言葉を皮切りに、衝突するオーズとゲール。

「響ちゃんは、あっちの子をよろしくなのだ〜」

「っえ!? あ、はい！」

オーズとゲール、響とクリス、それぞれの戦いが始まった。

タカー！

「マスター。」

タカカンドロイドについていく、ライドベンダーに乗るニル。

「……響。貴方は一体、何をやっているの？」

「！」

その途中で、白いリボンをつけた女の子・小日向 未来とすれ違う。

「……いたんだ、友達。」

少し止まって眩き、再びバイクを動かす。

〈現在、響さんが怪人と遭遇！ 幸いにもオーズが怪人と響さんを離しては、

くれています。イチバルを纏った少女に苦戦中です！〉

「了解。あとちよつとで、現場に着く！」

「ねえ、奏。」

「なんだよ、こんな時に。」

「私、立花が暴走した後、考えたんだけどだけど。」

「うん。」

二人は少し話、現場へと向かう。

《サーベルタイガー！パンダ！ゾウ！》

「あ！メダル変えるんじゃないか！」

「誰が素直に、敵の本命のメダルを使い続けるか！」

オーズはゲールの間を見て、「サーパンゾ」に変わる。

一方、響はクリスの攻撃をよけるのに精一杯のようだ。

「はあ！」

「ふん！」

オーズとゲールは互いに蹴りを入れ、互いに少し後ずさる。

ゲールは右腕にある蛇の意匠がある鞭で攻撃し、オーズは、「パンダクロ」で切り裂く。

切り口からは、セルメダルが零れ落ちる。

「こいつならどうだ！」

ゲールはそう言うと、オーズに近づき尻尾で攻撃する。

オーズは、「パンダアーム」と「ゾウレック」の力を最大限に活用し受け止める。

「なに!？」

「流石に、きついのだ〜」

「吹き飛ば〜！」

「そらよお！」

クリスの放ったミサイルとゲールの火球が、オーズ達の所で大爆発を起こす。

「お〜、嬢ちゃんやるじゃん！」

「はあ、はあ、嫌い！」

クリスに感心したように呟くゲール。クリスは肩で呼吸しながら言葉を返す。

土煙が晴れていき、クリス達が視線を向ける。そこには、先程までは無かったもの

が！

それはまるで……

「盾?！」

「……剣だ！」

上から声が聞こえ、見上げる。そこには翼と奏が立っていた。

「フン！ 足手纏いを庇いに現れたのか!?!」

「もう何も失うものかと決めたのだ！」

「それに響は、響らしい力があるさ！」

「奏さん！翼さん！」

クリスマス達とは反対の方にいる、響も気が付き声を上げる。

それと同時に、ゲールが火球のエネルギーを溜める。

火球が放たれようとしたその時！

「グワ！」

「がはっ！」

「私もいる。」

瞬間移動のように動いた、ポセイドンに変身したニルによって防がれ、

引き飛ばされた。（オマケにクリスマスも）

「そいぞ、ニル。」

「マスターが、夜行性なだけ。」

「（人食い）妖怪だからね〜」

ニルに近づき、軽口を言うルーミア達。

「おいおい！ 揃いも揃って、オールスターかよ！」

「皆さん、あの子は！」

「「分かっている！」」

クリスマスの叫びで、（響以外の）全員が戦闘態勢をとる。

それに対して、響が叫ぶ。 奏と翼は、軽く頷いて言う。

「使い魔の嬢ちゃんか・・・ここは、引くか！」

「待て！」

「ニル、追うな！」

「どうして？」

「僕は万全じゃないし、ライダー^そ少女^姿でグリードと戦うのは無茶なのだ。

例え、ポセイドンでもね。」

「・・・分かった。」

ニルの姿を見たゲールが森の中に消える。追いかけてようとするニルを、止めるルー

ミア。

そんな中、クリスが動き出す。ガトリングの照準を翼に向けようとするその時！

「！ニル！」

「分かった！」

ルーミアが何かに気が付き、ニルが動き出す。

その直後、クリスのアームドギアが二体のノイズによって破壊される。

「なにー！」

「「!?」」

「クリスちゃん！」

更に三体目のノイズがクリスに向けて、飛来する。響が悲鳴のような叫び声をあげる。

ノイズがクリスに当たるより、響が動くより、速くニルが助ける。

「・・・なんで？」

「マスターの命令。」

「・・・あと。仮面ライダーだから。」

「お前も・・・」

クリスの疑問に、答えるニル。その言葉を聞き、何かを考えるクリス。

「なあ、仮面ライダーってn」

「命じたこともできないなんて。・・・あなたはどこまで私を失望させるのかしら？」

「[!:]」

クリスが何かを言いかけたその時！女性の声が響き渡る。

全員が周囲を見渡すと、上空を滑空する四体のノイズの下にある、

展望スペースの手すりに寄り掛かる男女に視線が行く。

「この気配は・・・」

女性の方は、喪服のような黒い服に

蝶の飾りのあしらわれた黒い帽子を被りサングラスをしている。

金髪の髪が風に揺られ、その手には以前クリスがノイズを操った杖が握られていた。一方男性は、ジーパンにオレンジ色のシャツと言うラフな格好でいた。

「フイーネ！（なのか！）」

クリスとルーミアが、女性の方の名前を言う。

「久しいな、宵闇の妖怪！」

「この前会ったのは、何年前だ〜？」

「400年前だ！」

「あゝ、あの時か〜！」

懐かしそうに、ルーミアが呟く。

「フイーネ！」

クリスが立ち上がり、フイーネに言う。

「確かに命令は遂行できてねえかもしれないが、こんな奴がいなくたって・・・

こんな奴がいなくたって戦争の火種くらいあたし一人で消してやる！」

「・・・戦争ねえ〜」

響を呼び指しながら言うクリスの横で、小さく呟くルーミア。

「そうすれば、あんたの言うように人は呪いから解放されて、

バラバラになった世界は元に戻るだろう！」

「はあ…… もうあなたに用は無いわ。」

クリスの叫びを聞き、フィーネは冷たく返す。

「な、なんだよそれ！」

クリスの言葉に答えず、右手を上げるフィーネ。

すると周囲に散らばっていた鎧の破片が光となり、フィーネの元に集まり消えた。

フィーネは杖を奏者に向けむけ、男性は両手を握りめ持っていた物をオーズ達の前に投げる。

旋回していたノイズは奏者を襲い始め、男が投げた物・セルメダルの破片が

ミイラ男のような見た目で顔に大きな黒穴がある怪物……

「屑ヤミー！　じゃあ、あいつゲールなのだ！」

「マスタア、こいつらは？」

《タートローバ！タ・ト・バ　タ・ト・バ！》

「マスカレイド・ドーパントと同じなのだ」

「ふん！」

「分かった。」

ゾンビのような動きで、オーズとニルに近づく。背中合わせになる二人。

ニルへの説明の途中でタトバコンボに変わり、説明が終わると地面から、

どこか恐竜を思わせる紫色の斧・「メダガブリュー」を取り出す。
「待てよ！ フィーネエエー……！」

去つていくフィーネとゲールを見たクリスが追いかける。
それを横目に、必殺技の準備をする。

《ガブツ！ ゴツクン!!》

《タトバ！ ムム（タトバのカラオケサウンド）》

「ハアアア……！」

オーズの持つ斧とニルの持つ槍にエネルギーが溜まる。

「はあ……！」

「セイヤアア……！」

それぞれが横に薙ぎ払い、「グラウンド・オブ・レイジ」と「ディープスパウダー」で屑ヤミーを撃破する。

「ニル……！」

「任せて。行つて、マスター。」

残りをニルに、任せてこの場を去るオーズ。

第13話：雨の日と悲しみと旧友

～三人称視点～

「・・・いないな」

変身を解いたルーミアは、クリス達を追いかけるも見つけれずにいる。

そこに、三つの影が近づいてくる。

タカー！ タコー！ クジャク！

「みんな、見つかったのか？」

ルーミアが探索の為に放った、カンドロイドだ。

カンドロイドは、ルーミアの問いに体を使って答える。

ルーミアが探していたクリス達は・・・

「アタシが用済みってなんだよ！ もう要らないってことかよ！

アンタもあたしのことを物のように扱うのかよ！」

電話をしていたフィーネに向かって叫ぶクリス。

それを、興味深そうに見ているゲール。

「頭ん中グチャグチャだ！　何が正しくて何が間違ってるのかわかんねえんだよ!!」

フィーネは立ち上がり、受話器を置き電話を切る。

「……どうして誰も、私の思い通りに動いてくれないのかしら?」

クリスの方にむき、ノイズを操る杖・「ソロモンの杖」からノイズを召喚する。

クリスは、ペンダントを手に取るが詠唱を歌わない。

「さすがに潮時かしら?」

「っえ!」

「そうね。貴女のやり方じゃ、争いを無くす事なんて出来やしないわ。」

「せいぜい一つ潰して、新たな火種を二つ三つにばら撒く事くらいかしら?」

「あんたが言ったんじゃないか!　痛みもギアも、あんたがあたしにくれたものだけ

が……」

「私の与えたシンフォギアを纏いながら、毛ほどの役にも立たないなんて……」

「そろそろ幕を引きましょうか。」

泣きそうになりながらも言うクリスの言葉を遮って、クリスを否定する言葉を言う。

クリスがショックを受けているその時!

「なんだ、これ？」

「なに！」

「・・・来たか。」

ノイズが闇に溶かされていく。それに対して、三者三様の反応をしめす。そして扉がゆつくりと開き、少女が歩いて部屋に入って来る。

「子供!？」

クリスが驚きの声を上げる中、新たに召喚したノイズをルーミアにぶつける。

「おい！ 逃げ・・・」

「嘘、だろ。」

ルーミアは、自身の爪でノイズを切り裂いた。

続けざまに、自身の周りに色とりどりの光球〔弾幕〕を作り出しノイズに向けて放つ。

「まだ、邪魔をするか！ ルーミア！」

「うん。君の欲望は、君自身を不幸にさせる。だから、止めるのだく！」

「止めさせねよ！」

「ゲール！」

ルーミアに殴りかかるゲール。バク転で回避をしたルーミア。

黄金の鎧をいつの間にか纏っていたフィーネが、鞭でルーミアを攻撃する。

飛ぶことで回避をする、ルーミア。

「どうして、お前がフィーネに協力してるのだ！」

「なに！ こいつの味方をすれば、お前と戦えるからだ！」

戦いながら、会話をする二人。

「私も、この鎧も不滅。未来は無限に続いて行くのよ！」

「カ・デインギルは完成しているも同然。もうあなたの力に固執する必要も無いわ！」

「カ・デインギル？ ・・・そいつは？」

「あなたは知り過ぎてしまったわ。」

フィーネが呟いた言葉に、疑問を持つクリス。そんなクリスに、杖を向ける。

「逃げろ！」

「っ！ ちきしようおー！！」

クリスにノイズが迫るが、ルーミアが前にでてノイズを撃破する。

状況を理解したクリスが泣きながら、テラスか逃げる。

「ムーライトレイ！」

ー月符「ムーンライトレイ」ー

クリスを追いかけようとしているノイズ、自身に迫るノイズ、ゲール達の牽制攻撃
それを同時にするため、スペルカードを発動させる。

弾型の弾幕がルーミアを中心に放たれ、両手からそれぞれビームを放つ。

時間は経ち、雨が降り注いでいた。

登校には早い早朝、人通りが無い商店街を傘を差した未来が歩いていた。

彼女はルーミアと別れた後、二課に保護せられ、響の秘密を知った。

受けがたい現実を知った未来。それは、親友とのぎすぎすした関係になるには、十分だった。

憂鬱な気持ちのまま歩いていた時ふと、水がススか炭か何かで

黒く濁り流れているのが視界に入る。

視線で追いかけると、すぐ横の建物と建物の中の細い路地で・・・

「っ！」

そこには、人が倒れていた。

「大丈夫ですか!?!」

慌てて駆けよる未来。

抱き起こしてみると、自分と年の変わらない、長い白髪を二つに束ねた少女だった。

見たところ大きなケガをしている様子はないが、呼吸は荒く、熱もあるようだ。
「あ！ 未来ちゃん！」

自分を呼ぶ声が聞こえ、顔を向ける。そこには、ルーミアがいた。

「ルーミアさん！」

「つて！ クリスちゃん！」

「知り合いですか？」

「ちよつとね〜」

「それより、この子をどこかに運ぼう。」

「それなら、ふらわーのおぼちゃんの所が近いです。」

「了解。 そつち持って、こつちを持つから。」

「分かりました。」

「・・・ハッ！ 此処は？」

飛び起きる、クリス。自分が知らない部屋で目を覚ました。

「俺の部屋だ。」

「よかった、目が覚めたのね。」

男女の声が聞こえ、自分以外にいる事に気づく。

成人男性が小説を手に持ち、自分ぐらいの少女が、クリスを見ている。

「びしょ濡れだったから着替えさせてもらったわ。」

「安心しろ、新品のやつだ。」

二人の言葉に、自身の服を見る。二人の言うとうり、新品のジャージだった。

「なっ!?!」

「未来ちゃん。」

驚きの声を上げる中、合間に中年の女性と少女が入って来る。

「あ、起きたのか〜」

「あんた!」

少女は洗濯物を持っている。

「どう? お友達の具合は?」

「目が覚めたところです。ありがとうございます、おばちゃん。」

のぶながさんも、布団まで貸してもらっちゃって・・・

「気にしないでいいんだよ。あ、お洋服洗濯しておいたから」

「あ、私手伝います。のぶながさん、ルーミアさん。」

「うん。まかせて欲しいのだ」

「ああ。」

クリスをよそに、話が進んでいく。

「楽になつて来たか」

「あ、ああ・・・」

「それは、良かったのだ」

「今は、安め。」

「・・・」

二人の言葉を聞き、何かを考えこむ。

そこに、桶とタオルを持って未来が帰ってくる。

「じゃあ、体拭こうか。」

「ノブ君。」

「拭く？」

「汚れちゃつてるでしょ？」

この時、静かにルーミアとのぶなが部屋を出る。

「・・・あ、ありがとう。」

「うん。」

何処か、ぎこちなくお礼を言うクリス。

「なんにも、聞かないんだな。」

「うん。」

クリスの背中には、背中にはいくつもの痣があった。

これは、フィーネによってつけられたものだ。

「私は、そういうの苦手みたい。今までの関係を壊したくなくて・・・」

「なのに一番大切なものを壊してしまった。」

「それって、誰かと喧嘩したってことなのか？」

「・・・うん。」

「喧嘩か、あたしにはよくわからないことだな。」

「友達と喧嘩したことないの？」

「・・・友達いないんだ。」

「え？」

クリスの一言に、驚く未来。

「地球の裏側でパパとママを殺されたあたしは、ずっと一人で生きてきたからな。

友達どころじゃなかった。」

「そんな！」

「たった一人、理解してくれろと思つた人も、あたしを道具のように扱うばかりだつた。誰もまともに相手してくれなかつたのさ。」

「大人は、どいつもこいつもクズ揃いだ。痛いって言つても聞いてくれなかつた、やめてと言つても聞いてくれなかつた。」

「あたしの話なんて、これっぽっちも聞いてくれなかつた。」

クリスは幼き日、家族と外国に行き、戦争に巻き込まれた。

親が殺されたその日より、人の見にくいところを見て育つてしまった。

その為、大人を信頼できずにいる。

「なあ。お前その喧嘩の相手、ぶっ飛ばしちまいな！」

「え？」

「どつちがつええのかはつきりさせたら、そこで終了。とつとと仲直り。そうだろ？」

「できないよ、そんなこと。」

「ふん、わつかんねーな。」

クリスの言葉に、首を横に振る未来。

「でも、ありがとう。」

「ああ？ あたしは何もしてないぞ？」

「ううん。 本当に、ありがとう。 氣遣つてくれて。 あ、えーと・・・」

名前を言おうとして、名前を聞いてないことに気づく未来。

「・・・クリス。雪音クリスだ。」

「優しいんだね、クリスは。」

「!・・・そうか。」

未来の言葉に驚き、背を向ける。

「私は小日向未来。もしもクリスがいいなら、私はクリスの友達になりたい!」

クリスの手を握りながら言う、未来。その言葉を聞き振り返り見つめる、クリス。

しかしクリスは、手を振り切つて離れて出ていこうとするが、ふと立ち止まって口を開く。

「あたしは・・・」

「お前たちに酷いことをしたんだぞ?」

「え?」

未来が首を傾げる。

「こんな所で居たんだ・・・織田おだ信長のぶなが」

「ああ。 久しいな、武神・オーズ。」

「いや、ルーミア。」

ルーミアとのぶなが・・・いや、信長が二人だけに空間で話し出す。

「にしても、驚いたのだら まさか、グリードとして蘇っているなんて。」

「俺としては、欲も何もないお前が、まだ生きている事に驚きだ。」

「・・・どうして、お前は生きている？」

「どうしてって・・・ ちゃんと見えなくても、空は、青いからかな」

「空が、青いか・・・」

「っふ！ そうか。」

「なあ、ノブ君。」

「なんだ？」

「続けるのか？」

「いや、辞めよう。 今の世を生きるのも、悪くない。」

「そっか、そくなのか」

「！」

話がひと段落したその時！ ノイズが現れた事を示す警報が鳴り響く。

クリスマス達と一緒に店を出る。外では逃げ惑う人々が大勢いた。泣きながら手を引かれてる少女、

恐怖に怯えながらも少しでも逃げようとしている人々でいっぱいだ。

「おい、一体なんの騒ぎだ?」

「何ってノイズが現れたのよ!」

「知らないのか?」

「っ!」

フィーネの所で過ごしていたクリスマスは、ノイズのサイレンを知らなかった。

未来と信長の言葉を聞き、理解し唇を噛む。

「ルーミアさんの事、政府の人に話していませんから。」

「!」 ありがとうなのだ」

思い出したかのように、ルーミアに耳打ちをする未来。

「急ぐぞ。」

「ああ・・・」

「くっ!」

「クリス！」

信長が声をかける中、クリスが逃げてる方向へと逆の方へと走っていく。

それに気づいた未来が声を上げる。

「僕が、行くのだ！」

「ルーミア！」

ルーミアがクリスを追いかけてようとした時、信長がルーミアに何かを投げる。

振り返ったルーミアは、右手でキャッチする。

「これって！」

「持っていい。お前の戦に必要な物だろう！」

「ありがとう、ノブ君。」

信長から「カニ」と「エビ」のコアメダルを受け取り、走り出すルーミア。

第14話：信用と仲直りと重力コンボ

↳ 三人称視点

人気が無くなった、商店街をクリスが駆ける。

「はあ、はあ、」

膝に手を置き、呼吸を整える。

「あたしのせいで関係のない奴らまで・・・」

「うわあああああー!!」

悲痛な叫びをあげるクリス。涙が流れ、アスファルトを濡らす。

「あたしのしたかったことはこんな事じゃない！」

「けど、いつだってあたしのやることは・・・いつもいつも!!」

両手両膝を付き、泣くクリス。

そんな彼女の周りに、ノイズが集まる。

「あたしはここだ！ だから・・・関係ない奴らのところになんて行くんじゃない！」

「Killter・・・ゴッホ、ゴホッ！」

立ち上がり、ノイズを避けながら詠唱を歌おうとする。

だが、万全の状態じゃないからか、むせてしまう。

そこに上空を飛んでいた、鳥型ノイズがその身をドリルのように変形させ、クリスにせまる！

「奮！」

気合の入った男性の声が聞こえ、アスファルトが大きく隆起してクリスを守る。

《 スキャニングチャージ！ 》

「セイヤアアー！」

そこに、オーズが「タトバキック」をしてアスファルトを壊しながらノイズを撃破する。

それを横目に、男性・風鳴 弦十郎がクリスを抱きかかえビルの屋上へと跳んだ！

「大丈夫か？」

「っ！」

弦十郎から、パツと距離をとるクリス。

「よつと。」

そこに、オーズも跳んでくる。

「お前、本当に人間か？ 実は、本名が野菜ほい宇宙人じゃないのか？」

「いや、俺は紛れもなく人間なのだ。」

「そくなのから。」

「な、なんでだよ……」

「うん？」

「仮面ライダー。お前は、何であたしを助けてくれるんだよ！」

「……あたしは、何度もあんたにひどい事をした。なのに、何で！」

「そんなに、親切にしてくれるんだよ。」

「別に親切じゃないよ。だから、信用してなんて言えないな」

「つえ？」

「ただ、目の前の事を必死にやってるだけだからね。」

「さくてつと！ そろそろ、ノイズを片付けないとまずいでしょ。」

「それだけ言うと、オーズは戦いに戻る。」

「目の前の事……」

「*Killiter Ichai val tron*」

オーズの言葉を復唱し、シンフォギアを纏い空中のノイズを撃破する。

「おっさん、ご覧のとおりだ！ あたしらがここの連中をやっつけるんだから、

他の連中の救助に向かいな。」

「しかし！」

「あたしは、大人を信用できない！ それに、仮面ライダーもいる。」
「・・・分かった。」

（彼女を頼んだぞ、オーズ！）

クリスの言葉を聞き、移動する弦十郎。

《クワガタ！ゴリラ！バツタ！》

【ガタゴリバ】と変わったオーズがノイズを叩く！

そこに、後ろからノイズが迫る。しかし、オーズに攻撃する前に打ち抜かれる。

「これで、お相子だからな！ 妖怪。」

「ありがとうなのだ〜」

「ねえ、家に来ないか〜？」

「はあ！ 何言つて・・・」

「無いより、ましでしょ。」

「・・・」

戦いながら、会話をする二人。

「まあ、嫌なら強制は、しないのだ〜」

「いや、世話になってやる。屋根ある方が、ましだからな。」

「あ！ 言っておくが、利用するだけだからな！」

「つふ。 分かったのだ。 じゃ、そうと決まれば！」

ベルトのメダルを、取り換えてスキャンする。

《サイ！ゴリラ！ゾウ！》

《サ・ゴーズ・・・サ・ゴーズオツ！》

「♪：Sun goes up」

「うおおおー！ー！」

「うお！：うお！：うお！」

重量系動物の王へと変わり、ドラミングを始める。

すると、周囲にいたノイズが地面に倒れ、動けなくなる。

「クリスちゃん！」

「任せろ！」

【BILLION MAIDEN】と呼ばれる技、

4門の3連ガトリング砲からの一斉掃射が動けないノイズを襲う。

《スキヤニングチャージ！》

ちなみに信長は、逃げる途中で子供を助けるため別れた。ケータイを使い、会話をする二人。

このノイズは音に反応して攻撃をしかけるようで、思うように動けない二人。「う、」

おばちゃんがうめき声をあげ、ノイズが反応する。

「私、響に酷いことをした。」

「今更、許してもらおうなんて思っていない。」

それでも、一緒に居たい。私だって戦いたいんだ。」

「だめだよ、未来・・・」

「どう思われようと関係ない。響一人に背負わせたくないんだ・・・」

それを見た未来たちが、小さな声で話す。

「私！もう迷わないッ!!」

未来が立ち上がり、思いを叫び、走り出す。

それを見た響も、おばちゃんを連れ離れる。

しばらく逃げ続けてた未来だったが、体力の限界が来た。

(もう走れない……)

その場に崩れ落ちてしまった未来。

(ここで終わりなのかな？ 仕方ないよね、響……)

(だけどまだ、響と流れ星を見ていない！)

未来は立ち上がり、再び走り出す。無情にもノイズが押しつぶそうとした、その時！

「……槍？ 誰が？」

一本のワインレットの槍がノイズを貫く。

未来が辺りを見渡すが、誰もいない。

「未来……！」

「響！」

そこに、響が走って来る。そして、未来に抱き着いた。

「きゃー！」

限界を超えて立っていた彼女は、受け止めれずに響と一緒に坂を転げ落ちる。

「いったあい……」

「いたた。」

この後二人は、気お互いの思いを話し合い無事に仲直りする事が出来た。

「・・・良かった。」

その光景を遠くからカンドロイドの力を借り、水色髪の戦士が見ていた。

第15話：死体と調査とクリスの涙

（三人称視点）

「大丈夫でしょうか？」

「マスターが付いてるから・・・」

ニルとセレナが部屋で、話し合っている。

ちなみに机の上には、カンドロイドが複数、セルメダルが数枚、

そして、グレネードランチャーのような見た目の銃が置いてあった。

「・・・あの、ニルさんk」

「要らない。」

「・・・ケーキ、食べますか？」

「ん。」

ニルは手に持っている居たセルメダルを机に置き、

セレナも読んでいた髪を机に置いて立ち上がった。

一方、セレナに心配されていたルーミア達はと言うと・・・

「なんだよこれ・・・」

目の前の光景を見たクリスが呟く。

フィーネの屋敷にやって来た二人が目にしたのは、荒れ果てた屋敷だった。

「わっお！ この前よりも、酷くなっているのだ」

ルーミアが軽く流しているが、大広間はそこら中に血まみれの死体があった。

ルーミアは死体の一つに近づき・・・

「っ！」

「はむっ！」

腕を引きちぎり・・・食べた。思わず口を塞ぐクリス。

「？ 僕がどういふ妖怪か、フィーネから聞いていなかったのか？」

「聞くのと、見るのは違うんだよ！」

骨を投げ捨て、服で口元を拭いたルーミアがクリスの様子に気づいて声をかける。

クリスの返答を聞きながら一瞬間に包まれ、血が付いて無い服に変わる。

「？」

ガタン！

「っ！」

物音が聞こえ、振り向くクリス。そこには二課の司令、風鳴弦十郎が立っていた。「違う！あたし達はやってない。やったの」

クリスが言い切る前に、獣を装備したグラサンに黒スーツの人達が入ってくる。

「つくー！」

「・・・」

身構えるクリスと、成り行きを見守るルーミア。

黒服の男性たちクリス達をスルーし、死体に近づく。

「??」

困惑するクリスの頭に、弦十郎が手を置く。

「誰も君らがやったなんて疑っちゃいない。」

「っー！」

「全ては君や俺たちのそばにいた彼女の仕業さ。」

弦十郎の言葉に驚くクリス。そこにルーミアが近づいてくる。

「掴んだのか？」

「!?君は！」

「あ、自己紹介して無かったのか。ルーミア、それが僕の名前なのだ。」

「・・・君が、オーズなのか？」

弦十郎の言葉に微笑むだけのルーミア。

「どうして、彼女に気をかけるのだ？」

「ヴァイオリン奏者の雪音まさのり雅律とその妻、声楽家のソネット・M・雪音が

難民救済のNGO活動中に戦火に巻き込まれて死亡したのが8年前。

残った一人娘も行方不明となった。その後、国連軍のバルベルデ介入のよって事態は急転する。

現地の組織に囚われていた彼女は発見され、保護。日本に移送されることになった。」

「ケツ！よく調べてるじゃねえか。そう言う詮索反吐が出る！」

弦十郎の説明に、鼻を鳴らしながら言うクリス

「当時の俺たちは適合者を探すために音楽界のサラブレッドに注目していてね。

天涯孤独となった君の身元引受先として手を上げたのさ。だが・・・

君が帰国直後に消息不明になった。俺たちも慌てた。2課からも相当数の捜査員が駆り出されたが、この件に関わったもののその多くが死亡、

あるいは行方不明という最悪の結末で幕を引くことになった。」

「俺は、君を救いたかった。引き受けた仕事をやり遂げるのは、大人の務めだからな」

「ハッ！大人の務めと来たか！余計なこと以外いつも何もしてくれない大人が偉そうに！」

クリスの言葉に黙り込む弦十郎。

「風鳴司令！」

「・・・どうした！」

「これを。」

黒服の一人が示すところを見る。クリスとルーミアも視線を向けた。

そこには、紙が貼られた死体が！ 紙には「I love you SAYONAR

A」と赤い字で書かれていた。

黒服の一人が紙を剥がそうと近づくと、

「それを剥がしちゃ駄目だ！」

ルーミアが叫ぶも一歩遅く、引き剥がされた。

「っ！ 常闇結界！」

その直後、辺りが爆発に襲われた。

・・・瓦礫の山が黒い半透明の壁に押し上げられ、吹き飛ぶ。

壁が消え空には黒い服を着た妖怪、ルーミアが浮かんでいた。

「ふいっ・・・ここまで大きな結界を張ったのはいつぶりだっ？」

「そうじゃねえよ！」

「うん？」

クリスの叫び声が聞こえ、地面に降りるルーミア。

「なんでギアを纏えない奴があたしを守ってんだよ！」

クリスが弦十郎に向かって叫んでいた。

「俺が君を守るのは、ギアのあるなしじゃなく、お前よか少しばかり大人だからさ。」

「大人!? あたしは大人が大嫌いだ! 死んだパパもママも大嫌いだ！」

とんだ夢想家で臆病者! あたしはあいつらと違う! 戦地で難民救済? 歌で世界を救う?

「いい大人が夢なんて見てるんじゃないやねえよ！」

「大人が夢を、ね……」

「本当に戦争を無くしたいのなら、戦う意思と力を持つ奴を片っ端からぶっ潰していけばいい！」

「それが一番合理的で現実的だ！」

「ふくん。まあ、その先に待っているのは、終末だと思っうな。」

話を聞いていた、ルーミアが言葉をこぼす。

「別に、クリスの欲望を否定してる訳じゃないよ。」

「……ただ、焦らないでね。叶えようと焦って、失敗して転んじゃったら大変だから。」

「つえ？」

「それに、大人になったから夢をかなえるための手段が多くなるんだ。

だから地獄だと分かつてても夢を叶える為に、

クリスの両親は君を連れて向かったんじゃないかな？」

「なんで？」

「証明したかったんじゃないかな？ 夢は叶うぞって。

そしてその瞬間を見ては欲しかったんだと思う。他での誰でもない、娘である君に。」

「っー！」

「君が嫌いだといった親は、君のことが好きだったんだと思うよ。

君の親は凄いや、君が誇れる親であるように必死に頑張ったんだから。」

「つう、うわあああ〜〜!!」

クリスが嗚咽を出し始めたのを見て、軽く浮かんだルーミアが抱き寄せる。

ルーミアの胸の中クリスは泣いていた。クリスの髪を撫でながらクリスを見守るルーミア。

調査を終えた黒服が車に乗り込む中、弦十郎がルーミア達に話しかける。

「彼女の事を頼む。」

「ああ、任せてなのだ。」

「今はまだ、君達はそれぞれの道を進んでいるかもしれない。」

だが、その道はいつか俺たちの道と合流すると信じている！」

「いままで戦ってきた者同士が、手を取り合えるていうのか？」

世慣れた大人がそんな綺麗事言えるのかよ？」

「ホント、ひねてるなあお前・・・ほれ！」

クリスの言葉に苦笑いを浮かべた弦十郎。通信機をクリスに投げ渡す。

「限度額以内なら公共交通機関は使えるし自販機で買物もできる。何かあればそれを
使え。」

中には俺へ直で繋がる連絡先が登録してある。何かあれば頼ってくれ。」

弦十郎が車に乗った瞬間・・・

「【カ・ディングル】！フィーネが言ってたんだ。」

それが何かはわからないけど、そいつはもう完成してるみたいなこと言ってた。」

「カ・ディングル・・・後手に回るのは終いだ。こつちからうって出てやる！」

弦十郎は、手を振り去っていった。

「……6面はもうすぐか。」

「ル……妖怪、どうしたんだ？」

「ルーミアで良いのだ。」

クリスの質問には答えずにヘルメットを渡し、自身もヘルメットを被る。

目の前に闇が溢れ出し、中から一台のバイクが出てくる。それに乗り、ルーミアたちも帰る。

第16話：激戦と新ライダーと水のコンボ

～三人称視点～

何処かの廃工場・・・のような見た目の建物の中から、

金属がぶつかり合う音や発砲音が聞こえてくる。

中ではメダジャリバーとディーペストハーブーンを手にぶつかり合う、

ルーミアとニルの姿があった。

「うっわー！」

少し離れた場所ではセレナが、

グレネードランチャーのような見た目の銃の反動で吹き飛ばされていた。

「何やってるんだよ。」

倒れたセレナにクリスが手を指し伸ばす。

「ありがとうございます。」

「しっかし、『バースバスター』って奴は反動がデカいな。」

セレナが銃・バースバスターを拾うのを見つめながらクリスが呟く。

「ルーミアさんは、片手で撃ってましたけど・・・。」

「マスターだし。」

苦笑いを浮かべるセレナに、スポーツドリンクを取りに来たニルが呟く。

そこに、クリスの通信機に連絡がくる。

〈クリス君聞こえるか!〉

「そんなに叫ばなくても、聞こえてるよ!」

へスカイタワー周辺でノイズが現れた。至急、来てくれ!〉

スカイタワーの上空で、ヘリが爆発する。

「そんな!」

「つく・・・」

「よくも!」

動揺する響達3人に向かって、ノイズが空から襲い掛かってくる。

何とか対処する3人だが、上空を飛ぶ超巨大ノイズが雨のようにノイズを使いしている。

「空飛ぶノイズ・・・どうすれば!」

「臆するな立花! 防人が後退ればそれだけ前線が後退するということだ!」

「翼の言うとうりだぜ、響。」

そんな三人に、大量のノイズが襲いにかかる。

だが、ノイズは三人に触れることなく何処からか放たれた弾丸と火球によって消える。

三人が弾丸が放たれた場所に視線を向けると、

両手にガトリングのアームドギアを手に持つシンフォギアを纏うクリスと、

「タカジャバ」となったオーズがいた。

「ああ!」

響が目を輝かせる。

「こいつがピーチクパーチク喧しいから来てやっただけだ! 勘違いすんじゃないやねえ!

お前たちの助っ人になったつもりはねえ!」

〈助っ人だ。少々到着が遅くなったがな。〉

「んぐ・・・」

クリスが睨め付けながら言うが、通信機から聞こえた声に赤面する。

「助っ人!」

「へそうだ！第二号聖遺物イチイバルのシンフォギアを纏う戦士、雪音クリスとオーズだ！」

「どうもなのだ」

「よっしゃ！ここは協力して一気に」

「知るか！あたしはあたしで勝手にやらせてもらう！邪魔だけはすんなよな！」

奏の言葉を遮って、アームドギアをボウガンに変えて上空のノイズを蹴散らしていく。

「ええ！」

「仕方ないなく地上の奴らは、僕達でやろうか。」

「あ、はい！」

「ああ。」

「心得た。」

オーズの言葉に地上のノイズを倒していく響達。

「奏ちゃん！」

「ちゃん付けで呼ぶな！」

背中合わせになったオーズと奏が動く。

《タカ！クジャク！バッタ！ギン！ギン！ギン！ギン！ギガスキャン！》

穂先を回転させた槍が生み出す竜巻で周囲の空間を吹き飛ばす【LAST∞METEOR】と、

タジャスピナーの盾部分【タジャドルフェイス】を開き、中に入っていたセルメダルの内、

3枚をベルトにセットしているメダルと同じ種類のメダルをセット、ギガスキャン！

【チャージブレイズ】と言う技を放ちノイズを撃破する。

「何しやがる！ すっこんでな！」

「貴方こそいい加減にして。一人で戦っているつもり？」

となりでは、体制を立て直そうとした翼にクリスがぶつかり口喧嘩に。

「確かに、あたしたちが争う理由なんてないのかもな。だからって争わない理由もあるものかよ！」

「こないだまでやりあっていたんだぞ。そんな簡単に人と人が！」

「出来るよ！」

響が、クリスと翼の手を取る。

「どうして私にはアームドギアがないのか、ずっと考えてた。けど今は何も思わない。それはきつと、こんな風に誰かと手を繋ぎ合うためにあるんだって思うから。」

だって、何も握っていないからこそ、二人の手を繋ぎ合うことが出来てるから。」

「立花／響……」

奏と翼は互いに見合わせ、自身の得物を地面に突き刺す。

翼の片手を手に取り、クリスの片手も手に取り握る奏。

「この馬鹿に当てられたのか!？」

「かもな。」

「そして、貴方もきつと……」

「冗談だろ……」

「二ヒヒ!」

四人の様子をノイズを倒しながら、横目で見えるオース。

「……あたしに考えがある!」

「どうするの?」

「あたしのイチイバルの特性は超射程広域攻撃。派手にぶっ放してやる!」

「まさか、絶唱か!」

「絶唱?」

「馬鹿。あたしの命は安物じゃねえ!」

響の疑問を無視して、クリスが否定する。

「ならば、どうやって・・・」

「ギアの出力を引き上げつつも、放出を抑える。」

行き場のなくなったエネルギーを臨界まで溜め込み、一気に解き放つてやる！

だが、充電中は丸裸も同然。これだけの数を相手にする状況では危険過ぎる。」

「そうですね、だけど私たちがクリスちゃんを守ればいいだけのこと！」

響の言葉に三人が頷き、クリスが驚く。

「時間稼ぎなら、このコンボだ。」

水色のコアメダルを三種類ベルトにセットし、スキャンする。

《イカ！マグロ！トビウオ！》

《イツカツグツウオ！》

「ハア~~~~ア！」

【イカグウオコンボ】に変わったオーズは、

腕についているマグロを模したジェット噴射機【マグロジェット】で急接近をしノイズを攻撃する。

ズを攻撃する。

【トビウオレッグ】のバネを利用し、強力な蹴りでクリスに近づくとノイズを撃破してい

く。

【イカヘッド】から、響達にかからないように煙幕を前方にはる。

墨のような煙幕はノイズに纏わりつき動きを止めた。

その隙に、空中に浮かぶノイズを水の鎖で一か所に集める。

「託したー!」

他の場所で戦っていた響達がクリスに向けて叫ぶ!

ギア全体を固定砲台形式へと変化させたクリスが放つ大技【MEGA DEATH Q UARTE】が残りのノイズを撃破する!

勝利に喜び、じゃれ合う響達を遠くから眺めながら、オーズは考える。

(うくん? ゲールが動いてない? だとすると、フィーネの方が・・・)

だとすると、ニルたちだけじゃ、対処が出来ないかも・・・でもなく

ノブ君に頼るのもなく・・・)

「つえ・・・」

「どうしたのだ?」

響が零した言葉で思考をやめ、話しかけるオーズ。

「それが・・・」

「なるほどね。」

「おっと、フィーネの所には、行かせねえよ！」

「「っ!?!」」

辺りにゲールの声が響き渡り、大量のノイズと屑ヤミーが現れる。

「こいつらと遊んでいろ！」

じわじわと詰め寄ってくるノイズと屑ヤミー。

「僕が道を切り開くから君達は、リディアンに向かって。」

メダジャリバーにメダルをセットしながら言うオーズ。

「でも、オーズさんが！」

「いいから！ 今ここで行かないと君は、君達は一生後悔する。」

「そうかもしれないけど！」

「誰だって、過去の後悔には勝てないから。」

「オーズさん……」

「そちらの提案は、ありがたい。でも、私は理由もなく戦っているお前を信用できない！」

オーズと響の会話に翼が入る。

「だった、僕を利用する気で行けば良いよ。」

「「！」「」」

オーズの言葉に皆が驚く。

「親切じゃないし、信じろって言えないから。」

ただ、目の前の事に必死になっただけだからからね。」

「死ぬほど後悔しないためにか？」

「うん。」

奏の言葉に頷く

「でも、この数じゃいくら、お前でも！」

「人々の平和が脅かされる限り、仮面ライダーは不滅らしいし、大丈夫なのだ。」

「・・・お願いします。オーズさん！」

「ああ、任せろ！」

《トリプル・スキヤニングチャージ！》

メダジャリバーを盾に振り、空間ごと敵を切り裂き一本の抜け道を作る。

その道を奏者が走り抜ける！

「気分は、バトライドウォーなのだ。・・・なんてね。」

数時間前・・・

ノイズによって、リディアンが襲われていた。

自衛隊が駆けつけられるも、生徒や職員を避難させる事しかできない。

「落ち着いて、シエルターに避難してください！」

未来は二課の協力者として、自衛隊の人と共に避難誘導をしていた。

「ヒナ！」

「みんな・・・」

そこに、安藤達がやって来る。

「どうなってるわけ？ 学校が襲われるなんてアニメじゃないんだから・・・」

「みんなも早く避難を・・・」

「小日向さんも一緒に・・・」

「先に行つて。私、他に人がいないか見てくる！」

「ヒナ！」

自信をあだ名で呼ぶ板場の声に振り返れずに、走り去る未来。

「君たち！ 急いでシエルターに向かってください！ 校舎内にもノイズが うわ！」

三人に気づいた自衛隊の一人が三人に近づき、声をかける。

途中まで言いかけたところで、後ろから白い革ジャンを着た男性に、押しされ倒れる。

「君……っな!？」

「早くこの子達を連れて、去れ！」

自衛隊員が文句を言おうとしたその時、上空からノイズが窓を割って入って来たノイズを、

男性が受け止めて、殴り飛ばす。

「……ノブ君？」

「ああ。弓美、お前に隠していた事がある。」

「え?！」

「見ての通り、俺は人間ではない! グリッドと呼ばれる、モノノ怪なんだ。」

そう言うのと全身をメダルに変え、鎧武者怪人の姿に変わる。

「っひー!」

「早く逃げろ。お前たちが逃げる時間ぐらい、作ってやる。」

安藤と寺島が小さく悲鳴を上げる中、板場が言葉を紡ぐ。

「なんか、ノブ君……アニメのダークヒーローみたい。」

「早くこっちに!」

正気に戻った自衛隊員の連れられて、この場を離れる安藤達。

板場は信長の姿を一目見てから逃げ始めた。

「学校が・・・響の帰ってくる所が！」

悲惨な光景となったりディアンを見て、未来は立ち尽くす。

そんな未来に向かって、ノイズが弾丸のように迫る。

「つえ？」

人やノイズのいない廊下に、亀のような怪物がいた。

「あの、人に・・・」

「やっと見つけました！ヤミー。」

そこにセレナがやって来る。腰には、ガチャポンやカプセルを模したベルトが巻かれていた。

「変身！」

懐からセルメダルを取り出しメダルをセット。

ハンドルを回してベルト中央のカプセルが展開する。中からカプセルが出てきて、手足や胸の所にいき、強化スーツを纏う。

ガチャポンベンダーや甲殻類をモチーフにして開発された強化スーツ。

カプセル周りには赤いラインが入っており、U型に緑色に発行している。

「これが、試作品のバース。」

カメラミーの視線の先には、自身の姿を観察している「仮面ライダーバース・プロトタイプ」が！

「……つと！ 関してる場合じゃ、ないですね。」

「きやああああー！！」

何とか緒川の手によって助けられ未来が隠しエレベーターの中で叫び声を上げる。

「ぐあ……」

彼女の目の前では、緒川を壁に押し付け首を絞めるファイネの姿が。

その身には、ネフシユタンの鎧を纏っていた。

「こゝも早く悟られるとは、何がきつかけだ？」

「塔なんて目立つ物を誰にも知られずに建造するには地下へと伸ばすしかありません……」

そんなことが行われているとすれば、特異災害対策機動部二課本部、

そのエレベーターシャフトこそ、カ・ディングル。そして、それを可能とするのは「漏洩した情報を逆手に、上手くいなせたと思っただが……」

その時、緒川の後ろの扉が開く。その拍子にフィーネから距離を取り懐から銃を取り出し3発、発砲する。フィーネに直撃するも、無傷だ。

「ネフシユタン……」

肩にある刃の鞭を使い、緒川拘束し空中に持ち上げる。

「緒川さん……」

「未来さん……逃げて……」

緒川が何とか声を絞り出す。それを聞いた未来は、逃げずにフィーネに体当たりをする。

「っひー！」

しかし、効果なく。肩ごしの視線に怯む。

「なぜ、自分を利用した人間を助けようとする？」

「っ！」

突然、後ろから声をかけられ振り向く。そこには、人間態のゲールがいた。

「貴方は？ それに、利用？」

「何故二課本部がリディアンディアンの地下にあるのか？ 聖遺物に関する歌や音楽データを、お前たち被験者から集めていたのだ。

その点、風鳴翼という偶像是、生徒を集めることによく約立やくだったよ。」

未来の疑問にフィーネが答える。

緒川を投げ飛ばし、未来に後ろを向けて歩き出す。それに続き、ゲールが歩く。

「……嘘を吐いても、本当のことを言えなくても、

誰かの命を守るために自分の命を危険に晒している人たちが居ます！

私は、その人を……そんな人たちを信じてる！」

未来の言葉氣に障さったのか、振り返ったフィーネが未来の頬を平打ちする。

「おい！ とつと行くぞ。」

「……興きが冷める。」

それだけ言うと、デュランダルがある保管庫の扉まで行き、二課の通信機を取り出す。認証パネルに近づけようとした時、撃ち抜かれる。

「デュランダルの元には行かせません！ この命に代えてもです！」

緒川が銃を構えていた。

「そんな体で、言わない。」

「お前は！」

「・・・響？」

その横には、165cmはあると思われる響にそっくりな女性が立っていた。「使い魔のお嬢ちゃんか。」

ゲールが小さく呟く中、フィーネが緒川と女性・ニルに向かって鞭を振るう。

「待ちな、了子！」

何処からか声が聞こえたかと思ったら、天井が粉碎され瓦礫が落ちてくる。

土煙が晴れるとそこには、弦十郎の姿が！

「私をまだその名で呼ぶか・・・」

「女に手を挙げるのは気が引けるが・・・二人に手を出せば、お前をぶっ倒す！」

弦十郎とフィーネが会話中、ニルとゲールがぶつかる。

「・・・ここじゃ狭い！地上に出るぞ！」

ゲールは自信をメダルの塊に変えると、そのまま弦十郎があけた穴を通っていく。

「・・・」

一瞬未来達を見てから同じく弦十郎があけた穴を通って地上に向けて飛ぶ。

崩壊した学校の外に出ると、怪人態（本来の姿）になるゲール。

「変身。」

リボンが付いてない髪を靡かせながら地面に降りながら、

既にメダルがセットされたベルトを装備する。

《サメ・クジラー・オオカミウオ！》

その見た目は今までと違い、正しく仮面ライダーと呼べる姿。

使用したメダルの意匠がある逆三角形の「トライングデルタ」が胸にある。

タトバコンボの補色のアーマー身にまとう「仮面ライダーポセイドン」がゲールに衝

撃波を放つ。

「ふん！」

ゲールは火球で向かえ撃つ。

《クレーンアーム！》

その横では右肩に「クレーンアーム」を装着し、中距離から攻撃を仕掛けるプロトバ

スの姿や、

巨大なノイズと戦う、鎧武者怪人の姿もあった。
——戦いは始まったばかり——

第17話：コンボと集まった戦士と巫女の欲望

（三人称視点）

黄昏時、普段なら帰宅する人や観光客で賑わっているスカイタワー周辺。

そこは今、ノイズや屑ヤミーが支配する空間となっていた。

「まるで、クウガの世界のグロンギ集団だなく、確か、滅びの闇が原因だっけ？」

その中で、気の抜けた少女の声が響き渡る。

「……異変解決と行こうかあ！」

「♪：Anything Goes! OOO Special Edit.」

声の正体は、オーズ（イカグウオコンボ）に変身しているルーミアだ。

先程は違い気合の入った宣言のあと、オーズを中心に水面が広がり、闇に包まれる。

この現象は、イカグウオコンボの固有能力、自身の周りに水を生み出し操ると、ルーミアが持つ、闇を操る程度の能力を組み合わせた結果なのだ。

「はあー」

暗闇の中など関係なしに、水面を飛び跳ねるように動き、

拳で攻撃する瞬間に空気や水素を利用したジェット噴射で強化する。

その一撃で攻撃を当てた屑ヤミーだけでなく、周りの敵も吹き飛ばした！

《 スキヤニングチャージ！ 》

「セイヤアー！」

その場でジャンプし、「マグロジェット」のジェット噴射と

【トビウオレッグ】バネを利用した強力な飛び蹴りライダーキック

【イカグウオクラッシュ】が、ノイズ達を撃破する。

《 サーベルタイガー！メガネウラ！アンモナイト！ 》

《 サーマイト！ サアー！ メ！ イト！ 》

メダルを変え、コンボチェンジするオーズ。

【サーメイトコンボ】となったオーズが闇や水を吸収する。

「はあくー！」

【メガネウラーム】の背中にある羽を使い、短時間であるも空中いるノイズを攻撃する。

《 スキヤニングチャージ！ 》

「つふ！ つは！ はあー・・・」

着地した近くにいた屑ヤミーを左足の触手で拘束し、右足で蹴り上げ、跳び上がる。

「セイ、ヤアア！」

巨大化した、牙で周囲の敵ごと噛み砕く【バイト・オフ・サーベル】！

《サイ！ゴリラ！ゾウ！》

《サ・ゴーズ・・・サ・ゴーズオツ！》

今度は、【サゴーズコンボ】にチェンジする。

腕を横に伸ばし、その場で回る。オーズに攻撃しようとしていた敵が吹き飛ぶ。

「うおおー！ うお！うお！」

ドラミングで重力を操り、前方にいたノイズや屑ヤミーを超重力の中に閉じ込める。

両手を突き出し、腕からガントレット状の武器【ゴリバゴーン】を発射し、撃破する。

《スキヤニングチャージ！》

「はああ・・・」

その場跳び上がり、両足で踏み込む。後方の敵は振動で吹き飛び、

前方の敵は地面に拘束され、オーズに引き寄せられていく。

「セイヤー！ー！」

頭の角と両手で間合いに来た敵を撃破する【サゴーズインパクト】で粉碎！。

再びメダルを変えてスキヤン。

《ライオン！トラ！チーター！》

《ラタ・ラタ・ラトラアータアー！》

《ガタキリバコンボ・キリツバ・ガタキリバツ！》

「はあ！」

【ガタキリバコンボ】となったオーズが分身体【ブレンチシエード】を生み出す。

全てオーズが思い思いに攻撃していく。

《《 スキャニングチャージ！ 》》

「「セイヤアー！！」」

【ガタキリバキック】が、次々と敵を撃破していく！

残るのは、巨大ノイズ一体のみ！

《タカ！トラ！バツタ！》

《タートーパー！タ・ト・バ タ・ト・バ！》

《 スキャニングチャージ！ 》

「はああゝゝゝ．．．セイヤアー．．．」

足をバツタのように変化させ跳び上がる。赤・黄・緑のリングを通り抜けながら、

それぞれの色に対応した動物を模したのエネルギーを纏っていき、

強力なライダーキック、【タトバキック】で巨大ノイズを撃破する！

「つう！．．．」

爆発の煙が晴れると、今にも倒れそうなルーミアの姿が。

「早く……行かないと……」

コンボの疲労で倒れるルーミア。空には星が輝いていた。

月明かりが、奏者達を照らす。

「これは……」

「つくー！」

奏者たちが見た光景それは、瓦礫の山と化した校舎やヒビが入ってる壁、放置された戦車、荒れはてたグラウンド。

「未来！ 皆！」

「リディアンが……」

響はその場で膝から崩れる。

「……っ！アレは！」

「櫻井女史!?!」

奏と翼が校舎に不自然な人影がある事に気づく。

その正体は、二課の櫻井了子だった。

「フィーネ、お前の仕業か！」

クリスが了子の事をフィーネと呼ぶ。

「ふふふ、ハハハハハ!!」

「そうなのか・・・その笑いが答えなのか!? 櫻井女史！」

「笑つてないで、なんか言えよ! 了子さん！」

「あいつこそ、あたしが決着をつけないといけないクソツタレ・・・フィーネだ！」

クリスが叫ぶと、了子はメガネを取り、髪をほどく。

すると光に包まれ、髪が金髪になる。その姿は、まさしくフィーネだ!

「嘘・・・嘘ですよ? そんなの嘘ですよ? だって了子さん、私を守ってくれました。」

「あれはデュランダルを守っただけのこと。希少な完全状態の聖遺物だからね。」

ネフシユタインを纏ったフィーネは、響の言葉を否定する。

「嘘ですよ。了さんがフィーネだって言うのなら、じゃあ、本当の了さんは?」

「櫻井了子の肉体は、先だって食い尽くされた・・・いえ、意識は12年前に死んだと言つていい。」

超先史文明期の巫女『フィーネ』は、遺伝子に己が意識を刻印し、

自身の血を引く者がアウフヴァッヘン波形に接触した際、その身にフィーネとしての

記憶、

能力が再起動する仕組みを施していたのだ！

・・・十二年前、風鳴翼が偶然引き起こした天羽々斬の覚醒は、

同時に実験に立ち会った櫻井了子の子の内に眠る意識を目覚めさせた。」

「貴方が、了子さんを塗り潰して・・・」

「まるで過去から蘇る亡霊！」

ファイネの言葉に、啞然とする奏者たち。

「ファイネとして覚醒したのは私一人ではない。歴史に記される偉人、英雄。

世界中に散らばれた私たちはパラダイムシフトと呼ばれる

技術の大きな転換期にいつも立ち会ってきた。」

「その一つが『シンフォギアシステム』か！」

「そのような玩具、為政者からコストを捻出するための福受品に過ぎぬ。」

「あたしを拾ったり、アメリカの連中とつるんでいたのも、そいつが理由かよ!？」

「そう！全てはカ・デインギルの為！」

ファイネが答えた瞬間、地面を突き破り、巨大な塔が出現する。

「これこそが！地より屹立し、天にも届く一撃を放つ荷電粒子砲、『カ・デインギル』！」

ファイネは宣言した、これを使い月を穿つと。ファイネがそんな事をする理由。そ

れは……

「私はただ、あのお方と並びたかった。そのために、あのお方へと届く塔をシンアルの野に建てようとした。」

だがあのお方は人の身が同じ高みに立つことを許しはしなかった！

あのお方の怒りを買って、雷霆に塔を砕かれたばかりか、人類は躲す言葉すら砕かれた。果てしなき呪い、【バラルの呪詛】を掛けられたのだ。月が何故古来より不和の象徴として語られて来たのか、

それは、月こそがバラルの呪詛の源だからだ！

人類の相互理解を妨げるこの呪いを、月を破壊することで解いてくれる！そして、再び世界を一つに束ねる！」

誰もが持つ、【愛】の欲望。

フィーネが月を握り潰すかのような動きをすると、カ・ディングルが輝きだし、エネルギーを溜め始める。

「呪いを解く!?!」

「それはお前が世界を支配するってことなのか?! 安い! 安さが爆発しすぎて!!」

「あたし達が、あんたを止める!」

「フツ、永劫を生きる私が余人に歩みを止められることなどありえない。」

「こいつらのようにな！」

「「っ！」」

そこに男性の音が響く。

奏達が声の聞こえてきて方を向くと、そこにいたのは、怪人態のゲールだった。

ゲールの足元には、二人の女性が倒れていた。

「ニル！」

「セレナさん！」

ゲールがフィーネの方に移動したため、二人に近づく奏達。

「しっかりしろ！」

「つう、うくん……雪音さん。」

「っ！ 天羽？」

「えくと……誰か知りませんが、逃げてくださいい！」

「無理。」

「ええ！」

驚きの声を上げる響を横目に、フラフラと立ち上がるニル。

「しかし、その傷では！」

翼がニルに声をかけるも、腕を横に伸ばして止める。

「今日の風は、一段と物悲しいし……」

「っふー！」

ニルの言葉を聞いたセレナが思わず吹き出す。

「すいません。ニルさんの口からそんな言葉が聴けるとは思ってもいませんでしたから。」

「……あの町に生まれた、自然と感じるようになる。」

「ニルさんが生まれた町ですか？ 今度聞かせてください。」

そう言いながら、セレナも立ち上がる。

二人は頷き合い、懐からベルトを取り出し腰に装着する。

メダルをそれぞれセットする。

「変身！」

《サメ！クジラ！オオカミウオ！》

ニルの肉体は変化していき、セレナにはアーマーが装着される。

「なにー！」

「えええー！！」

そこに立っていたのは、仮面ライダーの姿に変身した二人だった。

「リベンジ戦ですー！」

「・・・行けるな、奏者？」

「ああ！」

「・・・ああ。」

「は、はい！」

ニルの問いに、知っていた奏とクリスが答え、遅れて答える。響は完全に動揺して

いた。

「CroitzalronzellGungnirZizzl」

「Imyuteusamenohabakirritron」

「BalwisyalNescellgungnirtron」

「KilliterIchhailtron」

今ここに！　フィーネを止める為、6人の戦士が並び立った！

第18話：別れと託されたモノと炎のコンボ

↳三人称視点

月明りが、ルーミアを照らす。

「……っ！」

何かを感じし、目を見開く。その瞳の色は紫色だ。

覚醒したばかりの彼女の近くに、巨大な影が降り立つ。

「……巨大なヤミーか」

巨大なカメラヤミーが、口から何かを吐き出す。

「ノブ君！」

吐き出されたのは、あちこちがボロボロの信長だった。

彼の姿を見たルーミアが、信長に駆け寄る。

「ノブ君！ しつかりするのだ！」

「ルーミア…… あいつを……」

「喋るな、喋らなくていいから……」

「あいつらを、守ってくれ……」

「・・・分かった。妖怪として、仮面ライダーとして、その願いを聞き入れるよ。」

立ち上がったルーミアは、赤色のコアメダルを三枚とりだし、ベルトにセットする。カメラミーの方を向き、スキヤナーでメダルをスキヤンする。

《タカ！クジャク！コンドル！》

《タ〜ジャ〜ドルウ〜！》

【鳥類の王】へと変身したルーミア。

タカヘッドは、「タカヘッド・ブレイズ」へと強化され、

胸の【オーラングサークル】は、他のコンボと違い一つの紋章（フェニックス）となり、

タトバコンボと同じく金色の縁がある。

「はあー、・・・はあ！」

「♪：Time Judged all」

背中にクジャクを模した光弾を展開し、ヤミーに向けて放つ。

【クジャクフェザー】が次々と巨大カメラミーに当たるも、あまり効いていない。

「だったら！」

背中に紅い翼を展開し、飛び上がる。

《スキヤニングチャージ！》

「ノブ君。」

変身を解いたルーミアが、信長の傍にやって来て座る。

「ルーミア。今日は、夜空が綺麗だ。」

「そつかく。もう僕は……」

「なあ、最後に頼みがある。」

「うん？　なあーに？」

「これを、彼女に渡して欲しい。」

「うん。」

花のブローチをルーミアに渡した後、信長はセルメダルの塊になる。

「今度こそ永久に眠れ、織田信長。」

ルーミアの手には、花のブローチとサソリのコアメダルが握られていた。

「……さてと！　終われない今度こそ、終われなくなってしまった巫女を助けないとね

」

リディアンに向かって飛び始める、ルーミア。

「エンキ。君に託された想いは、今度こそ絶対に繋げる。

その為にも巫女が起こした異変は、解決しないとな。」

第19話：満月と思いと悲痛な叫び

～三人称視点～

ファイネの鞭を躲し、翼が切りにかかる。

翼の斬撃を躲したところに、クリスの放った弾丸が、ファイネに迫る。

ネフシユタインを振るい、弾丸を叩き落す。

その隙に、奏がガングニールを手に突っ込む。

そんな奏に向けて、エネルギー弾を放つ。

奏は立ち止まり、槍を回転させることでエネルギー弾を防ぐ。

4対1の状況で、ファイネは引けを取らない。

その近くでは、【バース・プロトタイプ】左肩に装備された【バースCLAWs】の
一
つ、

【クレインアーム】を使用してゲールを拘束していた。

ゲールは腕に力を込め、拘束するロープから抜け出す。

その一瞬の隙を付き、ポセイドンが槍でゲールを攻撃する。

しかしその堅い表皮に阻まれ、大したダメージは入っていない。

戦いに餓えたグリッド・ゲールを、二大ライダーは抑えるのがやっとだ。

カ・デインギルの輝きが増していく中、一つのミサイルが夜空に上がっていく。

「っ！」

「ほお〜」

「雪音さん！ニルさん！」

そのミサイルの先端には、クリスが居た。

それに一足早く気づいたポセイドン（ニル）は、ミサイル上に一瞬で飛び乗る。

「っ!?お前、どうして〜」

「良いから、行くよ。」

それに続いて、壊れたクレーンアームを何とか使いクリス達の所にやって来るバース

プロトタイプ

P（セレナ）

「一緒にやりましょう。」

「ああ・・・」

クレーンアームを解除し、ベルトに一枚のセルメダルを入れ、ハンドルを回す。

《ブレストキャノン!》

すると胸部に大きな砲塔が装備される。

それを確認したバースPは次々とセルメダルを投入し、ハンドルを回していく。

《セル・バースト！》《セル・バースト！》《セル・バースト！》《セル・バースト！》

槍や砲塔にエネルギーを溜めるポセイドンとバース、絶唱を歌うクリス。

月とカ・デインギルのあいだに来たとほぼ同時に、最後の小節を歌う。

二丁の銃が巨大な砲門へと変化し、カ・デインギルへと砲身を向ける。

「ブレストキャノン、シュート！」

カ・デインギルの発射と同時に、三人の必殺技が放たれる。

三人のエネルギーが一つとなり、カ・デインギルのエネルギーとぶつかり合う。

「つく。」

「ぐうう！」

（ずっとアタシは、パパやママの事が、大好きだった。だから、二人の夢を引き継ぐんだ！）

クリスの意気込みとは反対に、三人は徐々に押されていく。

クリスの武器や鎧にヒビが入っていき、バースの装甲も火花を散らしている。

ポセイドンの装甲も徐々に色を失いつつある。

（パパとママの代わりに、歌で平和を掴んで見せる。．．アタシの歌は、その為に！）

次の瞬間、三人は光に包まれた。

「あ……」

光が晴れると雲一つない夜空に、満月が輝いていた。

三人の影は、形も無かった。

「仕損ねた!?! 僅かに逸らされたのか!?!」

「おう、面白い事になったな。」

フィーネとゲールがそれぞれ思い思いに、言葉を呟く。

「あ、ああ……」

「うそ、だろ……」

翼と奏が目の前の光景に、言葉を出すのがやつとで、響に聞しては……

「……………」

言葉を出すことすら出来なかった。

「……………あああああああ—————!!!」

三人の消失を理解した時、響の悲鳴の叫びが空へと響き渡る。

ルーミアは赤色の弾幕を残しその場から消える。

弾幕を何とかわすファイネだったが突如、

後ろに現れたルーミアから放たれた黄色の弾幕を受け、吹き飛ばす。

「ふん！」

ファイネと入れ変わるかのように拳を振るうゲール。

その拳は小さな少女の片手にいとも簡単に受け止められる。

「……デイマーケイション……」

小さな声で、しかし鈴の音色ように透き通る声がルーミアの口から紡がれた。

次の瞬間、ルーミアを中心に波紋状に青、緑、赤の順に米粒弾放たれる。

数発受けながらもルーミアから距離を取るゲール。次の瞬間、ゲールから火球が放たれる。

火球を回避しながら左右に円弧状に青色の弾幕をばら撒くルーミア。

「……………」

その戦闘の光景を見ていた者たちは後に、幻想的な光景だったと語ったそうさ。

「準備運動はこの辺にしてそろそろ、本気のオーズの嬢ちゃんと戦いたいな！」

飄々と言葉を紡ぐゲール。その言葉に来てえるかのように、オーズドライブを装着する。

「それは！」

「まさか！」

その光景に奏と翼が驚きの声を上げる。

ルーミアの両目が紫色に光り、胸の中から紫色のメダルが三枚出てくる。

そのメダルを右手でつかみ取りドライバーにメダルを装填する。

ベルトを傾け、オースキャナーでメダルを読み取る。

「変身……」

まるで全てを凍り付かせるかのような冷たい声が紡がれる。

《 プテラー・トリケラー・ティラーノ！ 》

凄まじい冷気が周囲に拾っていき、辺りをルーミアものとも凍らせる！

「つな!？」

《 プ・ト・ティラーノ・ザウルース!! 》

「うおおおおおおお……!!!」

恐竜の様な咆哮を上げ、自身を包んでいた氷を吹き飛ばす。

紫色のアーマーに強化された皮膚は銀色のに輝く。

胸のオーラングサークルは、タトバやタジャドルのように金色にそして分厚く縁取れ

ている。

刺刺しい姿は姿は今までのオーズと違い、禍々しさを感じさせる。

「ハハハハハ！待っていたぞ、そのコンボを!!」

ゲールが狂気的な笑いを上げ、立ち上がったファイネが怒りの眼差しをオーズに向ける。

かつて地球上に存在し、巨大隕石によって滅びた恐竜の力を纏う紫のオーズ・・・
恐竜の王が、プロティラコンゴ戦闘態勢を取る。

獣のような動きでゲールとファイネを相手にするオーズ。

ゲールの火球を冷気を口部分から放ち相殺する。

ファイネの振るうネフシュタインの鞭を右手に持つ、メダガブリューで叩ききる。

建物が崩壊するなんてお構いなしに戦うオーズとゲール。

自身の計画を過去何度も潰された恨みのこもったファイネの攻撃。

何も知れぬ人が見たら、全員厄災の存在に思えるのだろう。

その戦いを力なく見つめる一人の少女が居た。ガングニールの奏者、立花響だ。

その瞳からは、涙が溢れ出ていた。その様子に奏も翼もどう声をかけていいのか分

かっつない。

「うう、未来・・・クリスちゃん・・・」

「あたしがどうしたって？」

そこに、二人分の足音が聞こえてくる。三人がそちらを見ると・・・

「クリス、生きていたのか!？」

「それに、確かニル!」

そこに居たのは、カ・デインギルのエネルギーに、

よって散っていったと思われていた、クリスとニルだった。

「クリスちゃん!」

「うん?もう一人の女性は?」

響が喜びの声を上げる中、翼が疑問の声をかける。

「セ・・・バースは、先に帰った。」

「まあ、戦闘のダメージがデカかったみたいだな。」

「それにしても、よう生きていたな!」

「おせっかいな、妖怪のおかけさ・・・」

時はさかのぼり、クリス達がカ・ディンギルとの打ち合いの末、光に包まれたころ……
「全く、世話のかかる使い魔（仮）と愉快なお友達だな〜」

緊張感のない声を出しながらカ・ディンギルのエネルギーを、
その身に吸収するサーメイトコンボのオーズ。

次の瞬間、ニルたちは闇に包まれる。

それ続き、エネルギーを吸収しきったオーズがその場から消える。

ニル達が闇の中から出ると、リディアンの近くにある森の中だった。

「っうー！」

「セレナさん！」

戦闘のダメージで倒れるセレナを優しく抱きしめるルーミア。

「お疲れ、後は任せて欲しいのだ〜」

「ルーミアさん……」

「安心したかのように眠りにつくセレナを再び闇の中に包み、何処かに転移させたルーミア。」

「マスター。」

「ルーミア！」

「二人は、大丈夫か？」

近寄って来た二人に声をかけるルーミア。その言葉に二人は顔を縦に振る。

「そっか〜・・・それじゃ、ラスボス戦と行こうか〜！」

地面に腕を埋め、メダガブリューを生成・取り出す。

「先に言っているから、ゆっくりこいよ〜」

上昇しながら、これからコンビニ行くかの様なノリで言葉をかけ、飛び去って行く。

場面は戻り、現在。

《 スキヤニングチャージ！ 》

両肩から伸びるトリケラトプスの角「ワイルドステインガー」がゲールを拘束する。

「ふん〜！」

頭部のプテラノドンの翼「エクスターナルフィン」の羽ばたきで冷気を送り氷漬けにする。

「ハアアアア、セイヤアアアアア!!」

脚部の装甲の一部が一つなりテイラノサウルスの尾「テイルデイバイダー」へと変化する。

そのままテイルデイバイダーを振るい、ゲールを粉々に砕く!

ゲールはメダルの塊となり、その一部のオレンジ色のメダル。

爬虫類のコアメダルが導かれるかのように、オーズの元へと飛んでいき、

その4枚のメダルを片手でキャッチする。

「つくー!」

「うおおおアアアアア!!」

すぐさま戦闘を再開する、オーズとフィーネ。

その時、歌が流れ始めたのを知らずに……

第21話：歌とシンフォギアの覚醒とライダーソウル

「ふんー！」

フィーネが振るう鞭をメダガブリユードで叩き切る。

弾丸を薙ぎ払い、フィーネに横一閃！

「つぐー！」

「その再生は、厄介だな……」

あれかどれだけの時間が経ったのだろうか？

1時間？30分？もしかしたら1分も経ってないのかもしれない。そんなあやふやの中、

内側から溢れ出しそうになる力を何とか抑えてフィーネと激戦を斬り広げる。

普段から封印してるコンボでもあるプロティラは、制御がいまだに出来ない。

正直、あのコアメダルらが良かったのだろうけど、あいにく今持ち合わせたない。

そもそも、互いに数万年にかけて何度もぶつかってきた相手。

たやすくメダルチェンジが出来るとも思えない。

「お前は人の欲望を尊敬する人食い妖怪だろーなら、私の欲望^恋を止めさせるなー！」

んでる。

あく暇だ。なんか、高エネルギーのフォニックゲインでパワーアップした、響ちやん達が念話で始めて暇なのだ！（念話出来ない）

あ、フィーネがノイズを出した。それを響ちやん達（十二ル）が遊撃に向かった。

「つて！何やつてるのだ、フィーネ!？」

ソロモンの杖を自身に突き刺したフィーネ。そのまま自身が呼び出したノイズを取り込んでいく。

そんなフィーネの執念に共鳴して何か後ろで動く。

「………嘘だろ〜」

そこにはゲールだったセルメダルの塊の中から、銀縁のコアメダルが浮かんでいる。

6枚のコアメダルは弾き飛ばし、フィーネを取り込み始める。

更に地面を突き破り、デユランダルがもはや難の塊かもわからない者の中へと飛んでいく。

「ハハハハハ……これが仮面ライダーのおぞましき力だ!!」

そこには、始まりの男を思わず炎の巨人がたたずんでいた。

所々、部位が欠損としていて、その戦闘能力は最強クラスの化け物。
仮面ライダーの負の感情のみを吸収し、自我を得たおぞましき怪物。

「我が名はコア！仮面ライダーコア!!」

この光景にニルを含めたニンゲンは、言葉を発する事が出来なかった。

「仮面ライダーの暗い闇の心を糧とし、異形と成りし悲しみを憎しみに変え戦うものだ
！」

「仮面ライダーの・・・闇の心だと！」

「異形になりし、悲しみって一体!?!」

あいつは何処から仮面ライダーの情報を手に入れたのだろうか？

「うくん・・・異形になる悲しみね〜」

「マスター・・・」

ニルを始めとし、この場の全員が僕を見つめる。

「貴様にもわかるはずだ！その苦しみが!!」

確かに、妖怪に転生した時は人を喰らう事に吐き気や嫌悪感を覚えたし、

自身の闇ちからに振り回されたりもしてた。

グリード化が始まった時は、不安でどうにかなりそうだった。だから、あいつの言っ

てる事は、

「分かるよ。けどね、異形になるって悪い事だけじゃないだよね〜」

仮面ライダーの始まりは悲しみを仮面の中に隠し戦い始めたのが最初なのかもしれない。

けど、そのおかげで笑顔になれた人がいる。命を助けられた人がいる。

希望を手にした人がいる。僕に憧れや夢を与えたのもまた、彼らなのだから。

「だから、君をここで……倒す!」

ベルトの傾きを直す、装着されたメダルは自動で僕の体内へと戻っていく。

懐から取り出すのはタカのメダル・桃が描かれたメダル・鷲が描かれたメダル。

異なる時代・異なる世界で仮面ライダーと戦った三種類の怪人の力が宿るメダルをセツト。

オースキャナー スキャンする!

《タカ! イマジン! ショッカー!》

《ターマシー! タマシー! ターマッシー!! ライダアアア魂!!》